國立政治大學日本語文學系
碩士學位論文

宮藤官九郎が描いた
日本人の人間関係像

國立政治大學
National Chengchi University

指導教授：楊素霞 博士

研究生：潘邵詮　撰

中華民國一一〇年六月

DOI:10.6814/NCCU202100955

謝辭

李安在拿下第二座奧斯卡最佳導演的時候，感謝了電影之神。而我在此要感謝的不是論文之神，是我的主耶穌。這兩年裡祂跟我開了不少天大的玩笑，但最終我還是來到了這裡，感謝主。

感謝我前後兩位論文指導教授：永井隆之老師與楊素霞老師。他們給了我最大的空間與最少的壓力去完成這篇論文，並提供了許多珍貴的指引。我還要特別感謝已經榮退的日文系徐翔生老師，包含我在內，許多日文系大學部與研究所的芸芸眾生都曾受過徐老師各方面的提攜與幫助，我們點滴在心頭。再來我要感謝我的家人，雖然我是個最高紀錄一年只回去一次過年的浪子，但他們還是默默的支持我，也沒給我太多壓力，希望我能盡快有個他們期待的內孫給他們抱。

在貓空山腳下的這四年，是段又長又奇妙的旅程。這段旅程中，我遇到了許多的夥伴。日文所的諸君：芷、家輝、昭榮、泱伶、きょうこ、玉ちゃん、伊藤さん、文晴、哲凱、佳穎、庭穎、宏沛、香萱、育哲還有很多人，我會非常懷念跟大家下課後一起去吃飯聊天、還有唱日 K 的時光。日研的強者們：昕然、曙萱、宛靜、俊霖等族繁不及備載，你們在課堂上的活躍總是讓人自嘆弗如。

瘦瘦班、QQ 班跟動物班的大家，你們是我在政大最珍貴的寶物。即使我未來的人生終將一事無成，但當我年華老去，在藝中 101、風雲樓、四維堂還有淡江盃的那些閃耀時刻，會是我一生掛在嘴邊、放在心底的美好回憶。而在那美好裡，有你有我。希望在人生的大舞會裡，我們還有機會共舞。

感謝傳院的傅秀玲老師，讓我這個選不了課的外系生旁聽了三個學期。「創作就是裸露自己的靈魂。」，我會謹記在心。

感謝在大四那天的秋天，推了我一把去參加研究所推甄，後來又背刺了我一刀的前女友。雖然形式不同，我還是遵守了把妳寫進論文謝辭的承諾。

感謝あいみょん、king gnu、ゆず、SMAP、杰倫、美秀集團、李芷婷、諫山創、動視暴雪、微軟世紀帝國工作室等優秀的創作者，讓我在想短暫逃避慘澹現實的時候有個能沉浸其中的避風港。

在文山區待了 8 年，看過無數次魚肚白的天空，地縛靈終究還是來到散去的時刻。感謝我在景美和文山遇到的人們，在我的人生章節中，你們會是描寫最豐富的那一塊。

翻開這本論文的你，無論你為何而來，希望我的拙作能幫上你的忙。宮藤官九郎說過：「每個人在想像跟現實的自己做著完全不同事情的自己的時候，總會覺得那個身影特別閃亮。」

願你我都能把那個身影化為現實；

願你我都能在這段艱難的航程裡堅持到終點；

願你我都能在熱情中找到成就。

潘邵詮 令和 3 年 6 月 24 日 誌於盛夏的台灣.台北市.文山區

DOI:10.6814/NCCU202100955

摘要

本論文選定當代日本相當具代表性的電視劇編劇：宮藤官九郎的「SORRY 青春！」與「寬鬆世代又怎樣」兩部作品，從「校園」與「職場」兩個面向來比較劇中所描繪的人際關係樣態，與長久以來被定義成「日本人的特色」的日本人的人際關係樣態之間有何異同。並且分析宮藤作為編劇，運用了什麼樣的手法、向觀眾展現了怎樣的價值觀與思想。

在比較宮藤作品中的人際關係樣態與現實中的日本人人際關係樣態時，需要先定義何謂「日本人的人際關係樣態」。在第 1 章，先考察並定義了二戰結束以來，日本人的人際關係樣態於校園與職場兩個場域的形成過程以及持續至當代社會的影響。

戰後的日本校園，進行了自由化與民主化的改革。但與此同時，校園暴力與霸凌現象等問題也開始浮現。為了抑止校園內的不當行為，許多校規被設立，但這些校規在日後逐漸膨脹，成為現今校園的一大問題。整體而言，在日本的校園裡，集團主義與一齊主義的影響十分顯著。戰後的日本職場，受惠於韓戰與奧運等特需所帶來的好景氣，加上所得倍增計畫與日本列島改造論等政府的長期經濟計劃的作用，建立起了富裕且安定的勞動環境。但這樣的環境在泡沫經濟崩壞後也隨之瓦解，取而代之的是能力主義與成果主義開始在職場紮根，至今仍持續發揮著影響力。

而在第 2、第 3 章則進行了「SORRY 青春！」與「寬鬆世代又怎樣」的作品分析。從劇本中擷取對話場景，將宮藤筆下的人際關係樣態具體化。

在「SORRY 青春！」青春中，宮藤闡述了「衝撞既有體制或傳統不見得是件壞事」、「要尊重每個人的獨立性與差異」等理念。在「寬鬆世代又怎樣」中，宮藤展現了「社經地位低落者未必全然劣於高社經地位者」、「比起能力或成果，努力的態度更加重要」等思想。

整體而言，宮藤官九郎筆下的人際關係，乍看之下與現實社會的人際關係樣態頗有差異，甚至可說是處在對立面的存在。然而，宮藤並非要全盤斬斷並捨棄二戰結束以來所形成的日本人的人際關係樣態，或是採取全然的批判立場。而是揭示了在某種程度上繼承傳統，並以此為基礎去建構更加開放與多元的人際關係的理念。這是本論文研究所得出的結論。

關鍵字：宮藤官九郎、「SORRY 青春！」、「寬鬆世代又怎樣」、日本人的人際關係、日本校園、日本職場。

DOI:10.6814/NCCU202100955

要旨

本論文では、現代日本の代表的なドラマ脚本家、宮藤官九郎のドラマ作品『ごめんね青春』と『ゆとりですが何か』二本を選び、「学校」と「職場」の二つの側面から、作品の中で表現されている人間関係像と、今まで「日本人のありさま」として定義されてきた日本人の人間関係像との違いを比較する。そこから宮藤が脚本家としていかなる手法を駆使し、どんな価値観、思想を視聴者に示したのかについて考察することを、その研究目的とする。

宮藤作品の人間関係像と現実の日本人の人間関係像を比較するのに先立ち、「日本人の人間関係像」を定義しなければならない。第一章で、戦後、学校と職場における日本人の人間関係像の形成過程、及び現代社会に続く影響を分析した。戦後、日本の学校では、自由化、民主化の改革が行われた一方、同時に、校内暴力といじめ現象などの問題も起きた。非行行為を抑制するために制定された校則は、後に肥大化し、現代の学校の一大問題となった。全体的にいうと、日本の学校には集団主義と一斉主義からの影響が顕著である。日本の職場では、朝鮮特需やオリンピックがもたらした好景気だけでなく、所得倍増計画や日本列島改造論など、政府の長期経済計画の働きにより、豊かで安定した労働環境が築かれてきた。しかし、その環境はバブル崩壊後に崩れ、代わりに能力主義と成果主義が職場に浸透し、現代も影響力を発揮し続けている。

第二と第三章では『ごめんね青春』と『ゆとりですが何か』の作品分析を行い、その際に脚本から会話シーンを取り出し、宮藤が描いた人間関係像を明らかにした。『ごめんね青春』では、宮藤は「既成の体制や伝統にぶつかることは必ずしも悪いことではない」や、「人それぞれの独自性、差異を尊重すべき」といった理念を示した。『ゆとりですが何か』では、宮藤は「社会的地位が低い者は、必ずしも高い者に劣っているわけではない」、「能力や成果より、努力する姿勢がさらに大事である」などの思いを表した。

本論の最後において、宮藤が描いた人間関係像は、一見現実社会の人間関係像と大分違い、正反対のもののように見える。しかし、宮藤は、戦後形成されてきた日本人の人間関係像をひたすら切り捨て、または批判するばかりでなく、ある程度継承した上で、さらに開放的、多元的な人間関係を構築しようとしたと考える。

キーワード：宮藤官九郎、『ごめんね青春』、『ゆとりですが何か』、日本人の人間関係、日本の学校、日本の職場

DOI:10.6814/NCCU202100955

目次

序論 1
一、研究動機..... 1
二、先行研究..... 2
三、研究目的..... 6
四、研究方法..... 7

第一章　戦後以降の日本人の人間関係像の形成…… 8
一、学校の場合..... 8
１、戦後改革－学校教育の自由化・民主化..... 8
２、経済成長前期－自由化・民主化教育への調整、及びその影響..... 10
３、経済成長後期、平成前期－問題の多様化..... 12
４、二十一世紀－継続している諸問題..... 15
５、まとめ..... 17
二、職場の場合..... 18
１、戦後復興期..... 18
２、高度経済成長期..... 20
３、安定経済成長期..... 23
４、バブル期とバブル崩壊後の現在..... 25
５、まとめ..... 27

第二章　宮藤官九郎作品における人間関係像－『ごめんね青春！』……29
一、創作の背景..... 29
二、作品の内容分析..... 31

第三章　宮藤官九郎作品における人間関係像－『ゆとりですがなにか』…42
一、創作の背景..... 42
二、あらすじ..... 43
三、作品の内容分析..... 44

結論..... 53

参考文献 56

國立政治大學 National Chengchi University

DOI:10.6814/NCCU202100955

表目次

表１　教師に対する暴力事件の推移 12
表２　いじめ件数の推移 15
表３ 32
表４ 34
表５ 38
表６ 44
表７ 48
表８ 51
表９　人間関係像の比較（学校） 53
表１０　人間関係像の比較（職場） 53

國立政治大學
National Chengchi University

DOI:10.6814/NCCU202100955

図目次

図１　『ごめんね青春！』の人物相関図 30

國立政治大學
National Chengchi University

DOI:10.6814/NCCU202100955

序論

一、研究動機

演劇は多くの芸術を融合した総合芸術である。人間の人生は一度しかないが、演劇を観賞することで、私たちは違う人生を何度も体験することができる。数多くの演劇の形の中で、テレビドラマは人々の生活に一番近く、一番親しいものである。映画を観賞する時、視聴者たちは限られた時間と空間の中で映画を味わって、上映時間の間に視聴者たちの世界はその映画しか存在しない。それと違って、テレビドラマの場合は観賞しながら他のことを同時にすることも多い。ドラマは視聴者たちをその世界の中に引き込むものではなく、視聴者たちの生活の一部になるものである。つまり、その国のテレビドラマを観れば、その国の生活、文化、社会、民族性などが分かる。ドラマは現代社会において、異文化研究の一番良い素材のひとつとも言えるだろう。

そしてすべてのドラマは最初脚本から始まる。演技が上手な俳優陣、センス抜群の監督と優秀なスタッフたちが揃っていても、良い脚本がないと、いい作品を生むことは到底できない。だから、物語を作る脚本家は実に大切な役割を背負っているのである。

この二十年間、ドラマの脚本家といえば、すぐに挙げられる名前はいくつかある。『ロングバケーション』、『オレンジデイズ』など数々の大ヒットドラマを手がけていた北川悦吏子。『古畑任三郎』シリーズや『新撰組！』、『真田丸』などの脚本を担当し、喜劇の作風が代表的な三谷幸喜。それから、日本ドラマ界では一番代表的なテレビ大賞「ザテレビジョンドラマアカデミー賞」の最優秀脚本賞受賞歴に史上最多の十一回を記録し、文部科学大臣賞も受賞した宮藤官九郎である。

時事ネタを織り交ぜた、ユーモアのあふれる脚本は宮藤官九郎の特徴であり、視聴者たちの共感を呼んだ原因である。そして私も宮藤の脚本に魅了された視聴者の一人である。本論文では、宮藤の作品を二本選び、また、その中で表現されている人間関係像と、今まで「日本人のありさま」として定義されてきた日本人の人間関係像との違いを比較する。そこから宮藤が脚本家としていかなる手法を駆使し、どんな価値観、思想を視聴者に示したのかについて、考察して行きたいと考えている。

DOI:10.6814/NCCU202100955

二、先行研究

日本文化と日本人が特別な存在であることは、昔から世界中に認識されてきている。日本国内でもこういった考え方が継承され続けてきている。日本の社会像、特に人間関係の諸相についての著書、創作、研究なども多い。青木保は、著書『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』では、戦後の日本文化論や日本人論の変容についてまとめ、そしてそれについて四つの時期に分類した。

まずは「否定的特殊性認識」時期（１９４５～１９５４）である。１９４６年、アメリカの文化人類学者ベネディクトが戦時の研究に基づき、『菊と刀』を出版した。『菊と刀』では日本社会の核心は「集団主義」と「恥の文化」の二点にあると指摘し、この二点は以降の「日本文化論」の主要論点を提供することになった[1]。この時期の日本においては、坂口安吾の「堕落論」など、日本文化に否定的な態度を示した論点は多かった[2]。『菊と刀』で指摘された「集団主義」と「恥の文化」を、「民主主義的論理」の導入と「精神的内面的革命」の推進により是正しようという呼びかけもあった[3]。

第二の時期は「歴史的相対性の認識」時期（１９５５～１９６３）である。この時期、日本国内では加藤周一の「日本文化の雑種性」と梅棹忠夫の「文明の生態史観序説」、海外ではアメリカのロバート・ベラーの『日本近代化と宗教論理』のように、日本国内外において、否定的な視点から日本の「独自性」と、及びそれとは対照的な、日本と先進欧米諸国との「類似性」が強調されるようになった。それは、日本の「自信回復」に大きく役に立った[4]。

第三の時期は「肯定的特殊性の認識」前期（１９６４～１９７６）と後期（１９７７～１９８３）である。この時期の日本は飛躍的な経済成長を成し遂げ、再び世界の大国として歩き始めた。日本文化論と日本人論は「経済大国」の「自己確認」の追求の一部として盛んだった[5]。

---

[1]青木保『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』（中公文庫、１９９９）５５頁。
[2]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』５６頁。
[3]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』６４頁。
[4]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』８４頁。
[5]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』８７頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

この時期において代表的な著書の一つは、土井健郎による『「甘え」の構造』である。土井氏は、同書で日本人の独特な心性について述べた。義理と人情、他人と遠慮、内と外など、甘えの心理から生み出した様々な概念と価値観は、日本の社会と日本人の言動、人との接し方などに大きな影響を与えたと主張している[6]。また、文化学者中根千枝は、著書『タテ社会の人間関係』で、ヨーロッパを比較基準とした従来の社会科学的方法論を用いるのではなく、日本の人間関係像に適用できるオリジナルの分析方法を試みた。結論として、中根氏は、日本人の社会生活中の非論理性が難点であると述べた。しかし同時に、いくら非論理性であっても、その社会的システムは必ず何らかの規則に基づいたものに違いない上で、日本社会に存在しているあらゆる現象は、「日本的」なものではなく、社会的システムによって生み出した合理的、必然的な産物だと主張した[7]。

他にも、ベネディクトが指摘する恥の文化に挑戦する、作田啓一の『恥の文化再考』、集団主義を擁護した上で日本文化論の下に「日本的経営論」という変形があると指摘した尾高邦雄の『日本の経営』、集団主義と個人主義の間にある「間人主義」こそが日本人の行動様式の公準だと主張した浜口恵俊の『「日本らしさ」の再発見』などの著作があり、日本文化論に関する議論が展開されていた[8]。

７０年代に入ると、日本文化論の諸主張は大衆消費財となり、「タテ社会」、「甘え」、「間人主義」などのことばがマスコミを賑わした[9]。それまでの日本文化論を総括するような議論が現れ、特に１９７９年に出版した村上泰亮、公文俊平、佐藤誠三郎の『文明としてのイエ社会』と、エズラ・ヴォーゲルの『ジャパン．アズ．ナンバーワン』の二冊が代表的な書物である。この時期は正に「肯定的特殊性」を謳歌するというような日本文化論が、マスメディアを支配しその絶大の影響力を発揮した黄金時代であった[10]。

第四の時期は「特殊から普遍へ」時期（１９８４～）である。８０年代の日本と欧米諸国との間には経済、貿易的な摩擦が生じ、そのため外部から日本への見方は『ジャパン．アズ．ナンバーワン』に見られる日本礼賛論から日本批判論へ転じた[11]。６０年代に『日本の経営』を著した尾高氏も２０年後になると同じテーマで再論を試みたが、その立場は逆となった[12]。

---

[6]土居健郎『「甘え」の構造』（弘文堂、１９９８）１８頁。
[7]中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社、１９６７）１８４～１８９頁。
[8]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容』１２１頁。
[9]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容』１２１頁。
[10]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容』１３３頁。
[11]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容』１４９頁。
[12]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容』１３４頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

青木氏は『「日本文化論」の変容』の末尾において、８０年代から９０年代にかけては、日本文化論は日本国内外に「否定的特殊性の認識」へ逆戻り、サイクルする傾向があった一方、他方で冷戦終結後のグローバル時代においては「独自性」と「普遍性」のバランスを取り、「日本文化論」の陥った閉じたサイクルを抜け出し、新しく開かれた新世紀を展望する「世界論」として、未来志向的な日本人の行動の支柱になることが再び可能となる、という考えを示した[13]。

以上のように、時代や国際政治環境の変化により、日本文化に対する肯定的な見方と否定的な見方のどちらでも存在している。捉え方が異なっているのであっても、日本文化の独自性、独特性が広く認められている。だが、『「日本文化論」の変容―戦後日本の文化とアイデンティティ―』は二十世紀末の１９９９年に出版されたもので、二十一世紀に入って以来、日本文化論や日本人論に関する論文や学術的な書籍はある程度減少した。実際、筆者は、可能な限り２０００年以降の論文や書籍を収集しようとしたが、結果としては、関連の文献は、青木氏がいう日本文化論の「黄金時代」であった７０年代から２０００年までのものに集中している。

ここで、特に、台湾の社会学者林顕宗の『日本社会』(2000)を取り上げたい。青木氏が外国人研究者による日本研究の重要著作をいくつか取り上げたように、筆者も外国人研究者による日本研究の著作の収集しようとしたが、結果として、解読と入手が比較的容易であり、本論の作成に最も役に立つのが林氏の『日本社会』であった。林氏は同書において、日本社会の人間関係について、「家制度」と「集団主義」が日本社会を支える柱だと主張し、その成り立ちと現代社会における様相を説明した。家制度と集団主義は過去の封建制度の下の「家」、「村」から生まれた産物で、特に家制度が企業の日本的経営様式に大きく影響した。「親会社」、「子会社」という言葉の表現、社訓・社風の存在、会社への帰属意識などが、家制度から企業の経営様式への具体的な影響である[14]。そして集団主義の形成について、林氏は、まず個人が集団に参与する要因について以下の四点を挙げた[15]。

（一）共同に関心するイシュー、物事
（二）共同な利害関係
（三）場所的接近（地縁性）
（四）共同なコミュニケーションルート

林氏は日本式の集団において特殊的な様相があると主張した。それは以下の通りである。

---

[13]青木保、前掲書『「日本文化論」の変容』１８３頁。
[14]林顕宗、張瑞雄『日本社會』（致良出版社、２０００）１４３、１４９頁。
[15]林顕宗、張瑞雄、前掲書『日本社會』１５０、１５１頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

（一）強烈な集団意識と連帯感
（二）集団的合理主義が個人的合理主義に代わること
（三）集団の個性を開発すること
（四）同質性が持つ対象を吸収し、異質性が持つ対象を排除すること

林氏は明白に集団主義の形成要因と日本式集団の特殊的な様相を提出した、本論では集団主義に関する討論を行う際、その論述が主な参考の一つになる。

『菊と刀』で「集団主義」が提出されて以来、様々な議論を重ねてきたが、日本社会、日本人の一大特徴としての位置付けが定着しつつあった。それはあらゆる場面や団体に適用されるとは限らず、あくまでもイメージ的な存在ではあるが、集団主義が日本で一定の影響力を発揮していると言える。本論で検討する学校と職場においても同様であると考えている。

以上から分かるように、日本人の人間関係像は相当な特殊性を持ち、長年にわたって、様々な分野で研究、議論、創作のテーマとされ続けてきた。テレビドラマ界も例外ではない。そして本論文と同じように、ドラマを素材とした関連研究も既に存在した。林晏如は、論文「從日本民族性的觀點探討日本人的言談特色―以日劇為題材的案例分析」で、日本人の国民性、即ち単一民族で単一言語の環境で生活しているうちに生み出した「同質性」、日常生活から家庭の内部まではっきりしている「階層的秩序」、他人と依存し合って生きていく「集団主義」、及び昔から日本文化に深く影響し、現在日本人が生活の理念としている「調和」、という四つの要素を日本のドラマには融合した、そこに日本ドラマの独特な美しさと魅力があると述べている[16]。このような特徴は宮藤作品にも存在するかどうか、本論で検証する。

宮藤官九郎についての先行研究や作品論はいくつかある。まず、評論家宇野常寛は、自らの著書『ゼロ年代の想像力』で、宮藤をゼロ年代前半においてもっとも重要な作家の一人と位置付けた。宮藤官九郎の作品は、個人と個人の間の自意識の世界でもなく、国家や社会という大きい世界でもなく、中間共同体の再構成についての描写が共通のテーマであり、しかもこの共同体は永遠ならざるもので、いつか終わりを迎える有限な存在であるとしつつも、その有限性によって共同体の強度を保つと述べている[17]。

前述の宇野氏の評論を具体的なドラマジャンルで言い換えれば、「大きい世界」とは制度問題、社会問題、民族問題、イデオロギーの衝突などのイシューを扱う社会派ドラマを言い、「個人と個人の間の自意識の世界」とは二

[16]林晏如「從日本民族性的觀點探討日本人的言談特色―以日劇為題材的案例分析」（２０１５）１３頁。
[17]宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房、２００８）１６３頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

人のメインキャラの心境に焦点を絞る恋愛ドラマである。この二つのジャンルは、『ゼロ年代の想像力』が出版された２００８年までの宮藤作品の中では、メインではなかった。本論で取り上げる『ゆとりですがなにか』が、宮藤初の社会派ドラマとされている。宮藤自身もこのドラマを「僕にとって革新的な、エポックメイキングなアナザーサイドの代表作[18]」として位置付けしている。しかし、『ゆとりですがなにか』は、宇野氏がいう「中間共同体」への描写がメインとなっている。ちなみに、宇野氏は明言していないが、「中間共同体」とは、家族や、本論で取り上げる学校のクラス、会社、社会人の友情でできた団体などを指していると考えられる。

さらに陳逸萱は、論文「宮藤官九郎的影像美學」では宮藤の作風について以下のように述べている。

> *宮藤は常に様々なシンボルとテクストを混ぜて創作を行っている。その間テクスト性を最大限に活用し、生み出した作品と映像は視聴者たちの心の中にある「現実」と「フィクション」の境を曖昧にさせ、この点から人気を得た[19]。*

宮藤のドラマ作品における間テキスト性の運用実例は多い。『タイガー&ドラゴン』（２００５、ＴＢＳ）と『いだてん～東京オリムピック噺～』（２０１９、NHK 大河ドラマ）での落語や、最新作の『俺の家の話』（２０２１、TBS）での能楽などが挙げられる。そして本論文で取り上げた『ごめんね青春！』（ＴＢＳ、２０１４）ではラジオ番組と校歌の形で表れている。

前述の先行研究では広い範囲で宮藤の作品における日本人の人間関係像と宮藤の作風を論じたが、本論文では、「中間共同体」としての学校と職場に焦点を絞り、宮藤の作品における間テキスト性に着目したい。

三、研究目的

テレビドラマは、その国の人間関係像を直接表している芸術作品である。宮藤が描いた日本人の人間関係像は、従来の論点と如何に異なったのか。現在の日本において代表的脚本家とされる宮藤は、作品を通じて視聴者にどんな価値観、メッセージを示したのか、これらの作品から今時の日本社会はどのように捉えられるのか。そして、宮藤官九郎の脚本には自分の独特なスタイルが溢れており、宮藤は、作品の中で、どんな手法でエンターテインメント性と芸術性の間に絶妙なバランスを取ったのか。それらの諸課題を本論文で詳しく究明したいと考えている。

[18]宮藤官九郎『ゆとりですがなにか』（KADOKAWA、２０１６）５頁。
[19]陳逸萱「宮藤官九郎的影像美學」（２０１０）２８頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

四、研究方法

宮藤官九郎は、連続ドラマの脚本家としてデビューして以来、およそ二十年の月日が経った。デビュー作の『池袋ウエストゲートパーク』を始め、『木更津キャッツアイ』、『タイガー&ドラゴン』など数々の名作を作ってきた。本論文では、『ごめんね青春』、『ゆとりですが何か』（日本テレビ、2016）を取り上げ、それぞれ違う二つの側面から考察していく。それらは、大多数の人々が経験したことがあり、社会化するに必要な過程を構築した学校と職場であり、『ごめんね青春』、『ゆとりですが何か』はまさしく学校と職場の人間関係を探究する作品でもある。

『ごめんね青春』―学校での人間関係

いじめは各国の教育現場で深刻な問題になっている。いじめの原因は各国の文化によって違う。日本の場合は、自分もしくは大多数の人と異なっている子が特にいじめられやすい。『ごめんね青春』の大きなテーマの一つは、自分と異なる他者を如何に受け入れるのか、ということである。宮藤は、同作品で、いじめ問題に直接言及していなかったが、仏教とカトリック、男子と女子、親と子などの差を乗り越えるに至ったまでの過程を描いた。同作品は、宮藤にとって初の学園系のものであるが、彼が如何なる手法で日本の学園生活と学校における人間関係像を描いたのかについて、第二章で考察する。

『ゆとりですが何か』―社会人の職場での人間関係

「ゆとり世代」は、日本社会において固有名詞となり、主に１９８７年度から２００３年度までの間に生まれ、ゆとり教育を受けた世代のことを指している。同作では、宮藤は、ゆとり世代の主人公たちが直面する色々な課題や、会社の同期間、先輩と後輩、上司と部下、恋人同士など社会人の人間関係について鮮明に描いた。第三章で、この作品を掘り下げることにより、脚本家としての宮藤の価値観、及び彼の日本現代社会への認識を解明したい。

宮藤作品の人間関係像と現実の日本人の人間関係像を比較するのに先立ち、「日本人の人間関係像」を定義しなければならない。第一章で、戦後、学校と職場における日本人の人間関係像の形成過程を考察する。その際に、戦後から現在までの歴史的流れを整理し、各時期の現象、重大事件、政策などを通して、その時期の人間関係像を解明する。さらに、まとめに、現代社会に残した影響を分析する。

DOI:10.6814/NCCU202100955

第一章　戦後以降の日本人の人間関係像の形成

一、学校の場合

本章では、戦後の学校での人間関係像の形成を明らかにする。それに際して、戦後日本の学校に起きた諸現象、学校の環境に影響した大きな事件や、政策などに重点を置きたい。

１、戦後改革－学校教育の自由化・民主化

第二次世界大戦の終結後、日本は、連合国軍の占領下で、連合国軍最高司令官総司令部(Supreme Commander of the Allied Powers、以下ＧＨＱと表記する）の指導に基づき、各領域で改革が施行することとなった。教育、学制の改革もその一環である。教育改革の担当部門として、ＧＨＱは民間情報教育局（Civil Information and Educational Section、以下ＣＩＥと略称する）を設置し、占領下における教育政策の策定はこのＣＩＥを中心に推し進められていく。ＣＩＥは、発足直後から、教育改革に関する調査、研究を推し進め始めたが、それに基づいてＧＨＱは１９４５年末まで、日本政府に対して四つの指令を発令した。その四つの指令の要旨は以下の通りである[20]。

（一）日本教育制度の管理
（二）教員及び教育関係者の調査、除外、認可
（三）国家神道、神社神道に対する政府の保証、支援、保全、監督及び宣伝の廃止
（四）修身、日本歴史及び地理に関する教育の廃止

戦後初期のアメリカ占領政策の基本目標は、単に日本の武装を解除することだけでなく、政治、経済、社会面において全面的に「非軍事化」と「民主化」を行うこととされた[21]。上記のＧＨＱが発した四つの指令にも、教育の「非軍事化」と「民主化」の精神が含まれていると見られる。

また、ＧＨＱの最高責任者、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥は、当時の幣原喜重郎首相に発した指令（「社会改革の即行に関する件」）の中で、「学校のより自由主義的な解放」について、「国民は政府が国民の主人というよりは、むしろ下僕となるごとき組織を理解することによって事実に基づき知識及び利益をえて将来の進歩を形成するであろう」と解

[20]日本図書センター『日本教育史』（日本図書センター、２０１３）３７４、３７５頁。
[21]日本図書センター、前掲書『日本教育史』３７５頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

説している[22]。さらに、マッカーサーは、アメリカ連邦教育局、陸軍省、国務省と共に、日本の新教育制度の方向に助言を与えることを目的とする教育使節団を組織した。この使節団は、１９４６年３月に来日し、同年４月に「第一次米国教育使節団報告書」を提出した。小、中、高校及び大学の６．３．３．４体制、６．３の義務教育、ＰＴＡ（監護者と教師の会）、キャンパスの開放、図書館とその他社会教育施設の役割を重視することなど、現在もなお存在している多くの概念や制度が、その報告書で最初に提案された[23]。

この状況の中で、日本政府は１９４７年３月に『教育基本法』、『学校教育法』を公布した。『教育基本法』と『学校教育法』は、自由化、民主化の精神が所々に含まれ、『教育基本法』の前文には、「我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである」という一句がある[24]。

新法に基づき、新制学校が学生たちにもたらした最も具体的、即効的な利点は、知識や技術の吸収ではなく、生活面の救済である。戦後、学生たちは社会的、経済的混乱に巻き込まれ、深刻な食糧難と住宅難に直面した。さらに地元を離れ、一人暮らしをする多くの学生たちは、家庭からの送金が途絶え、生計上の自立不能の状況に陥った。このような窮状に対し、文部省は「勤労学徒援護会」、「大日本育英会」などの民間組織を結成し、学生に補助を与え、奨学生の採用額を大幅に増やした[25]。また、当時の日本政府は、戦争で中断された給食制度の再開（1947 年）、『学校給食法』の施行（1954 年）、学生生活協議会・学生食堂連合会・全国学校協同組合連合会といった組織の開設などを通じて様々な援助を学生に提供した[26]。

給食のメニューについてであるが、日本政府は欧米諸国からの食料援助で獲得した乳製品やパンなどをメニューに大量に入れた。これをきっかけに、極端な米食重視だった日本人の食生活は大幅に変容され、日本においてはパンや乳製品の消費が定着するようになった[27]。

沖原豊は、著書『心の教育：日本教育の再発見』で、この時期学園における人間関係像について、以下のように述べている。

生徒の自主性尊重ということが唱えられ、教師と生徒の関係は対等に近いものとなってきた。戦前の童謡「すずめの学校」では、「すずめの学校の

[22]日本図書センター、前掲書『日本教育史』３７５頁。
[23]日本図書センター、前掲書『日本教育史』３７７頁。
[24] https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html、（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[25]日本図書センター、前掲書『日本教育史』３８７頁。
[26]日本図書センター、前掲書『日本教育史』３８７頁。
[27]日本図書センター、前掲書『日本教育史』３８７頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

先生は、鞭を振り振りちいぱっぱ」となっているのに対し、戦後の童謡「めだかの学校」では、「めだかの学校のめだかたち、だれが生徒か先生か」となっているところから戦前と戦後の教師と生徒の関係の違いを表している[28]。

以上の論述を踏まえ、戦後初期の日本学園では、学生たちは、上からの物資供給、そして民主化改革による心理的自由、開放な環境に置かれながらも、経済的な自立に頭を抱えたため、人間関係に悩む余裕があまりなかった。

２、経済成長前期－自由化・民主化教育への調整、及びその影響

１９５２年４月、サンフランシスコ平和条約の発効により、日本は主権を取り戻し、再び独立国家として歩み始めることになった。1950 年代中期から 1970 年代初期まで、日本は高度経済成長期を迎えた。こうした飛躍的な経済成長をもたらした要因の一つは、産業構造の急速な変化とそれに伴う技術革新や生産力の向上にあったとされている[29]。そして産業構造の変化に伴い、変化に見合う労働力の確保が必要になり、こうした労働力需要に応えるため、学校教育は人材の選別と配分という機能を求められることになる。

実例を挙げると、１９５０より日本経営者団体（日経連）や経済同友会などの経済関係団体は、教育政策に関する要望や意見を次々と発表していた。その中には、技術者養成計画に基づいた産業技術向上の確保の必要性を訴えるなど、養成面の具体的な意見が出された一方、小、中学校における勤労尊重の思想教育、社会生活上の訓練、しつけの必要性を強調し、また国家・社会・職場への帰属意識、及び労働者の勤労意識を身に付けるために道徳教育の強化を唱える、という要望も目立った[30]。

これを受けたかのように、中央政府各教育関連の審議会や委員会は、道徳教育、及び「人づくり」に関する政策方針・草案・理念をいくつか発表した。そのうち最も代表的な事例の一つは、『期待される人間像』である。

１９６６年１０月、中央教育審議会は、１９６３年、文部大臣の諮問に対し、答申「後期中等教育の拡充整備について」を発表した。この答申の別記として公表された広報資料の一つは『期待される人間像』である。

『期待される人間像』の目次は以下の通りである[31]。
第一部：当面する日本人の課題

[28]沖原豊、前掲書『心の教育：日本教育の再発見』１５７頁。
[29]山本正身『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』（慶応義塾大学出版会、２０１４）３７５頁。
[30]山本正身、前掲書『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』３７９頁。
[31]山本正身、前掲書『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』３８１頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

１、人間性の向上と人間能力の開発
２、世界に関われた日本人であることに
３、民主主義の確立
第二部：日本人にとくに期待されるもの
１、個人として
２、家庭人として
３、社会人として
４、国民として

ここで言う「期待される人間像」とは、個人としては「自由」・「個性」・「自己愛」・「意思」を持つべし、家庭人としては家庭を「愛の場」・「いこいの場」・「教育の場」にすべし、社会人としては「仕事に打ち込む」・「社会福祉に寄与する」・「社会規範を重んずる」をすべし、国民としては「正しい愛国心を持つこと」・「象徴に敬愛の念を持つこと」・「すぐれた国民性を伸ばすこと」に心掛けべしなどというものである[32]。『期待される人間像』が発表された後、賛否両論を含め様々な指摘が寄せられた。反対の議論としては、その「人間像」は抽象的で具体性が足りなく、そこに辿り着くための実際の方法も示されていない。また、全文の文体は訓戒的で、納得力と説得力が足りなく、他にも「愛国心の養成など危険な政治意図が含まれている」などの意見が多かった[33]。それとは対照的に、経済界では『期待される人間像』に対して肯定的な態度を示し、日経連などの経済組織は公の場で中央教育審議会を称賛したこともあった[34]。

同じ時期で同様に重視されるようになったのは、教育面における「能力主義」である。当時能力主義に対する見解は、以下の通りに示されている。

急速に進展する技術革新の時代での人材確保という観点から、国民一般の教育水準の向上と共に、経済関連の各分野において主導的な役割を果たしうる人的能力、すなわち「ハイタレント」の発見と養成を求めるものである[35]。

これ以降、「能力主義」的な価値観、思想は、日本の学園に浸透し、学園内の人間関係像に深く影響するようになった。

この時期の学園内の人間関係像の実例として、河上亮一は著書『学校崩壊』で以下のように述べている。

学校が、地域の有力者を中心とした大人たちのヨコのつながりの上に成り立っており、教師が何か言うと、その後ろに地域の大人たちの影があり、

[32]山本正身『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』（慶応義塾大学出版会、２０１４）３８２頁。
[33]日本図書センター、前掲書『日本教育史』４０１頁。
[34]日本図書センター、前掲書『日本教育史』４０１頁。
[35]山本正身、前掲書『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』３７８頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

それに支えられて、教育力が発揮できたのだということがわかってきたのである。もちろん、生徒が言うことを聞かないことはいっぱいあったが、教師に暴力をふるうとか、際限なく教師の言うこと拒否して、学校そのものを崩していくといったことはなかったである[36]。

このように、高度経済成長期において、日本の学校では、道徳教育の実施及び能力主義の導入により、具体的な「期待される学生像」、「生徒の鑑」が形成され、学生の人格、価値教育や、学園の人間関係に多大な影響を与えた。また、地域社会の学生への影響力や制御力は、この時期でまだ正常に機能していたとみられる。

３、経済成長後期、平成前期－問題の多様化

５０、６０年代、アメリカでは、校内暴力がすでに社会問題となり、小説や映画などのマスメディアでもこれを題材として取り上げられるようになった[37]。７０、８０年代に入ると、日本においても、校内暴力が起こり、深刻な社会問題となった。学校での生徒の暴力行為は、生徒間の暴力、器物破壊、対教師暴力という三種類に分けられる[38]。生徒間の暴力と器具破壊は過去にも少なからず発生していたが、表１に示されるように、この時期の校内暴力は、生徒による対教師暴力も加わり、各地で頻繁に起こるようになった。特に対教師暴力の件数や被害教師の人数は、７０年代中期から８０年代中期まで著しく増加した。

表１、教師に対する暴力事件の推移

年度	公立中学、高校生による事件総数		
	件数	被害教師（人）	補導人員（人）
１９７５	１４９	１７７	３０８
１９７６	１６１	２３４	４１６
１９７７	２１５	２５２	４０５
１９７８	１９１	２４５	３３０
１９７９	２３２	３２８	５１０
１９８０	３９４	５３２	７９８
１９８１	７７２	９４３	１６１２
１９８２	８４３	１１６２	１８９４
１９８３	９２９	１２８６	１９８９

[36]河上亮一『学校崩壊』（草思社、１９９９）４０頁。
[37]沖原豊、前掲書『心の教育：日本教育の再発見』５１、５２頁。
[38]沖原豊、前掲書『心の教育：日本教育の再発見』５２頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

１９８４	７４２	９１４	１３６９
１９８５	６７２	９２４	１１６４

出典：沖原豊『心の教育：日本教育の再発見』（学陽書房、１９８７）５３頁より再作成。

日本における校内暴力の原因に関して、沖原豊は研究チームを率い、調査したところで、以下の五つの原因を挙げている[39]。

（１）家庭のしつけの喪失
（２）学校規律の欠如
（３）マスコミの過度の暴力描写
（４）地域社会の連帯感の欠如
（５）攻撃的性格などの生徒の特性

この中の（４）地域社会の連帯感の欠如について、河上氏は『学校崩壊』でも以下のように指摘した。

> *しかし、こうした地域社会を背景とした安定は、私が二つ目の学校に移った１９７５年ごろには、もうほとんど崩れていた。高度経済成長のもとで、日本の中の村が解体し、都市に人口が集中しはじめ、ひじょうな勢いで人口の流動化が起こり、それに伴って地域の大人たちの安定したつながりも崩れていったのではないか[40]。*
>
> *戦後の日本社会は、豊かさを達成し、自由、平等、個第一という理念を社会のすみずみにまで行きわたらせることに成功した。つまり、日本は近代化を達成したということである。しかしそのかなで、地域共同体を壊し、それに支えられていた家庭や学校を裸にして教育力を奪ってしまった。”新しい子ども”たちはこのようななかで登場した[41]。*

また、第二次世界大戦の終結以降、イギリスの教育学者Ａ・Ｓ・ニイル（Alexander Sutherland Neill）が提唱した、許容的教育が世界中に広がり、その教育思想は戦後の日本にも大きな影響を与えている。許容的教育は、強制・制限しない教育、大目に見る教育、叱らない教育、罰しない教育という四つの特色を有し、これらの特色は、19７０、８０年代の日本の学校において著しく認められ、青少年非行及び校内暴力を生み出す土壌になったと、沖原氏は指摘した[42]。

７０、８０年代の日本学園において、校内暴力の中で、いじめ問題が特に深刻化した。恐喝、仲間外れ、シカト、物を隠すこと、悪口で中傷すること、使い走りをさせることや、犯してない罪を被せることなどのような、生

[39]沖原豊、前掲書『心の教育：日本教育の再発見』６７頁。
[40]河上亮一、前掲書『学校崩壊』４１頁。
[41]河上亮一、前掲書『学校崩壊』９０頁。
[42]沖原豊、前掲書『心の教育：日本教育の再発見』７３頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

理と心理的ないじめ行為が、日本の小中高校で頻繁に発生するようになった。文部科学省の調査[43]では、１９８５年度のいじめ発生件数は小中高合計１５５，０６６件、発生率は合計５５．６％に上り、戦後以来のピークに達した。いじめの原因と背景として、教師の体罰、集団心理、ストレッサー、自己制御の欠如などが挙げられている。

校内暴力などの学校内の問題に対し、８０年代後半から９０年代にかけて、校則をさらに完備させ、管理教育を遂行しようと唱える声が現れており、前述の河上氏と沖原氏もその支持者である。この状況の中で、生徒指導を拡充するという目的で、生徒の校内での行為のみならず、生徒の日常生活までを規範する校則が制定された。しかし、このような校則は人権主義者から批判を受けた。特に１９９４年に日本は国連の国際条約「児童の権利に関する条約」を発効したため、校則に生徒の意見も取り入れよう、子どもの人権・自由・平等・個性をもっと尊重しようといった呼びかけが、それ以前より盛んになった。校則と管理教育の擁護者の一人である河上氏は、それ以前においては、教師は校則を一々持ち出さなくても、生徒は教師の言うことに大抵従っていたこととは対照的に、現在においては生徒は教師に反論するようになり、教師は仕方なく校則に頼るようになった、と『学校崩壊』で述べた[44]。そして同書で、彼は以下のような校則への批判の声をも取り上げている。

（人権派の支持者から「トイレットペーパーを使う時に、一回〇〇センチ以内にすること」という校則の必要性と制定の理由について問い詰めた）
中学生相手になんでこんなこまかい規則をつくらなくてはいけないんだ、教師はなんでも規制しようとしているのではないか、とんでもない、という非難である。しかし、校則を非難した人たちは、このような校則を書かざるをえない状況があるという現実を全く想像することができないようだった[45]。

前述の能力主義の導入がもたらした具体的な影響は、「落ちこぼれ」の出現である。落ちこぼれという言葉は、本来容器からこぼれて落ちたもの（主に穀物などにいう）、あるいは全部処理しきれないで残ったものなどを意味するが、８０年代のメディアは、不登校生や引きこもりなどの学生を指すという意味で使用し始めた。後に授業についていけない生徒という意味合いも加えられるようになった。さらに、組織や集団についていけない人なら、学生だけでなく社会人を広く指して使われるようになった[46]。

---

[43] https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[44]河上亮一、前掲書『学校崩壊』１４８頁。
[45]河上亮一、前掲書『学校崩壊』１４８頁。
[46]https://www.weblio.jp/content/%E3%81%8A%E3%81%A1%E3%81%93%E3%81%BC%E3%82%8C（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

DOI:10.6814/NCCU202100955

以上のように、経済成長後期、平成前期において、日本の学校では、いじめといった校内暴力や、落ちこぼれなどの現象が起こり、教師も生徒も険しい状況に置かれた。そして荒れた教育現場を正すために、管理教育の精神に基づいた校則が制定され、その波紋が広がり、二十一世紀の学校の人間関係像にも影響している。

４、二十一世紀－継続している諸問題

二十一世紀に入ってからも、日本の学園では、８０年代から顕在化した諸問題が依然として存在している。過去校内暴力の中で最も問題視されていた対教師暴力は、以前のような飛躍的な増加がもう見られなくなったが、発生学校の割合いは８～１０％、１，０００人当たりの発生件数は０．６～０．８にとどまる程度である反面、減少の兆しも見られない[47]。

いじめ現象の現況に関しては、本論文で検討する『ごめんね青春！』が背景とした高等学校の統計資料（表 2）を取り上げたい。

表２、いじめ件数の推移

区分		学校総数：Ａ（校）	認知した学校数：Ｂ（校）	比率：Ｂ／Ａ×１００（%）	認知件数：Ｃ（件）	認知件数の増▲減率（%）	１校当たり認知件数：Ｃ／Ａ（件）
高等学校	２００６年度	５，４１２	３，１９７	５９．１	１２，３０７	－	２．３
	２００７年度	５，３４５	２，７３４	５１．２	８，３５５	▲ ３２．１	１．６
	２００８年度	５，８３１	２，３２１	３９．８	６，７３７	▲ １９．４	１．２
	２００９年度	５，７４８	２，１００	３６．５	５，６４２	▲ １６．３	１．０
	２０１０年度	５，６７２	２，３３２	４１．１	７，０１８	２４．４	１．２
	２０１１年度	５，６１３	２，１３３	３８．０	６，０２０	▲ １４．２	１．１
	２０１２年度	５，５７９	３，１７０	５６．８	１６，２７４	１７０．３	２．９
	２０１３年度	５，７４７	２，５５４	４４．４	１１，０３９	▲ ３２．２	１．９
	２０１４年度	５，７３０	２，６８６	４６．９	１１，４０４	３．３	２．０
	２０１５年度	５，７１１	２，８８４	５０．５	１２，６６４	１１．０	２．２
	２０１６年度	５，６９８	３，００３	５２．７	１２，８７４	１．７	．２．３
	２０１７年度	５，６８５	３，２１５	５６．６	１４，７８９	１４．９	２．６
	２０１８年度	５，６７４	３，５５６	６２．７	１７，７０９	１９．７	３．１
	２０１９年度	５，６６５	３，６３２	６４．１	１８，３５２	３．６	３．２

出典：「文部科学省　２０１９年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を（https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf、最終閲覧日：２０２１/０４/１５）再作成。

表２から見られるように、２００７～２００９年度の増減率は減り続けたが、２００９年度以降の十年間は増加する傾向が強かった。そこから、現在

[47] https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

DOI:10.6814/NCCU202100955

日本の学校ではいじめは依然として多発していることがうかがえる。

いじめの被害者に関して、国立教育政策研究所の調査[48]では、特定な生徒に限らず、多くの生徒が入れ替わりながらいじめに巻き込まれているのが実態である。そして、いじめの被害者を減らしていくためには、すべての生徒を対象に未然防止のための取り組みを進めることで、加害者を大きく減らす必要があると指摘した。

また、尾木直樹は、インタビュー[49]では根底にある日本の学校の一斉主義や同調圧力は生徒にストレスを与え、いじめを引き起こす要因だと指摘し、例として「同じページを開いて『ハイ、順番に』と朗読させ、リーディングをさせると、上手な子と下手な子の差がクラスのみんなに分かってしまう。下手な子がいじめられる原因を作るのです」と挙げた。そしてＳＮＳの普及により、教育現場の教師は生徒の様子が分からなくなってきた。生徒たちの人間関係は、ＬＩＮＥのグループなど教師や保護者の目が届かないところで動いている。その故、生徒たちの互いの関係性も見えなくなり、外部にいる教師は口出すことができないし、傍観的になってしまうと、尾木氏は述べた[50]。

前節で述べた、管理教育の精神に基づいた校則は、二十一世紀の学校でも存在している。その中、明らかに不条理な一部の校則は「やりすぎ校則」、「ブラック校則」と呼ばれる。このような校則に対し、アクティビストの増原裕子は、いくつかのＮＰＯのサポートで「ブラック校則をなくそう！」というプロジェクトを立ち上げた。ブラック校則の実例として、「髪の毛と肌の色を理由に校門で止められた」、「運動部でも平日はジャージでの登下校禁止」、「カップルは一緒に帰ってはいけない」、「暑くても顔や体をあおいではダメ」などが挙げられている[51]。日本国会でも校則をめぐる議論が展開された。２０１８年３月２９日、文教科学委員会では、日本共産党所属の吉良よしこ議員は文部科学大臣林芳正にブラック校則に関する質疑応答を行った[52]。これに対し、林大臣は、「児童生徒の特性や発達の段階を十分に考慮することなく厳しい指導を行うということは児童生徒の自尊感情の低下等を招いて、児童生徒を精神的に追い詰めるということになる」と答弁した[53]。

---

[48] https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2806sien/tsuiseki2013-2015_3.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[49] https://socialaction.mainichi.jp/cards/1/39（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[50] https://www.hosei.ac.jp/application/files/6215/7188/2612/2-2_2015.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[51] http://black-kousoku.org/（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[52] https://kirayoshiko.com/diet_discussions/page/3（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[53] https://kirayoshiko.com/diet_discussions/page/3（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

DOI:10.6814/NCCU202100955

５、まとめ

以上に考察してきたように、戦後から現在に至るまで、日本の学校において広く見られる、戦後で形成された人間関係像は、以下の４点に絞ることができると考える。

（一）生徒らしく

６０年代に『期待される人間像』の発表と道徳教育の導入がされて以来、日本の学校では、「生徒」という身分にある程度のイメージが定着されつつあった。前節で言及した、生徒に向けて校内、校外での服装や言動を制約するという校則が、理想的な生徒のイメージを作るための、具体的な一例である。

（二）集団主義、一斉主義[54]

尾木氏は、日本の学校に存在する一斉主義や同調圧力を批判した。そして香港のジャーナリストの蔣豊も、著書『天使與魔鬼―日本教育面面觀』において、日本社会で人間関係の調和と社会全体の安定を維持することが重視され、その上で多くの業界や分野で集団主義を体現した伝統儀式、統一された服装などが存在していると指摘している。また、学園はそのような社会的制約（儀式、服装など）を子供に躾させる場所だと述べている[55]。

（三）自分たちと違った他者への敵視、いじめ[56]

６０年代に能力主義が抬頭し、８０年代には「落ちこぼれ」というレッテルが出現した。現代の学校において、尾木氏が述べているように、学力が比較的低下している生徒は、団体に追いつけなくて、やがていじめ対象になってしまうこともある。自分や多数の人と違った他者への敵視、いじめの場合は、学力だけではなく、ルーツ、性的志向なども原因になりうる。なお、性的志向がいじめの原因であることについては、さらに詳しく後述する。

（四）校則への一方的な遵守

校内暴力など学校内の非行行為を抑制するために、８０年代後半より管理教育の精神に基づいた校則が現れ、現在まで実施され続けている。その中で、過度に肥大化し、やりすぎ校則や、ブラック校則となっているものもある。校則自体は制定当時にそれなりの必要性があったと思われるが、生徒たちがその制定の意図を知らないままで、ただひたすらに守りなさいと要求されることは多く、それは生徒が校則に対する反発心を生み出した要因だと思われる。

---

[54] https://socialaction.mainichi.jp/cards/1/39（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[55] 蔣豊『天使與魔鬼-日本教育面面觀』（香港中和出版、２０１７）２０、２１頁。
[56]山本正身、前掲書『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』３７８頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

二、職場の場合

本章では、戦後日本社会に起きた諸現象、労働環境に影響した大きな事件や政策などを通して、社会人の職場での人間関係像の形成過程について考察する。

１、戦後復興期

第二次世界大戦により、日本の産業は壊滅的な打撃を受けた。戦後、日本は、ＧＨＱの指導下で、社会・経済面において財閥の解体、労働改革、新たな労働法体系の建立、『独占禁止法』の公布、労働組合設立の推奨などの政策を進めてきた。戦前、各財閥の経営者一族はかなりな程度で日本経済を独占し、また政治面でもその影響力を発揮していたが[57]、財閥解体により、それら旧時代の経営者の多くは追放され、新しい経営者が企業の舵をとるようになった。新経営者たちの特徴は以下の四点にまとめることができる[58]。

一、経営陣に入る前に、その企業内、また所属する子会社、工場で、部長や工場長クラスの管理職に就いた経験がある。旧経営者一族との繋がりが薄い。
二、旧時代の経営者に比べ、所有する自社株の割合が低い。給料も低く、新入社員受給との格差が戦前より減少される。
三、大学卒業者が多く、開放の思想を持っている。
四、基層からの労働経験があり、第一線の状況に詳しい。

新経営者の出現と共に、企業制度にも変革が起きた。戦後の企業グループは、主に旧財閥系（三菱、三井、住友など）、新興メガバンク系（富士銀行、三和銀行、第一勧業銀行など）、各業界の独立企業系（新日鉄、トヨタ、日立など）、という三種類があり、企業がお互いの株を所有する場合は多い。その故、戦後、同族企業と個人が大株主になるという状況は戦前のそれより減り、それまでの「資本家」が消えた。労働者は資本所有者ではなく、経営者たちと運命共同体的な関係を築くようになり、「労資関係」から「労使関係」に変わった[59]。

労働者に最も直接に関わる改革は、新たな労働法体系の建立であり、その具体的な内容は、「労働三法」と言われる『労働組合法』、『労働関係調整法』と『労働基準法』である。『労働組合法』の冒頭では、「労働者が使用者との交渉において対等の立場に立つことを促進することにより労働者の地位を向上させること、労働者がその労働条件について交渉するために自ら代

[57]李卓『日本近現代社會史』（世界知識出版社、２０１０）２９２頁。
[58]李卓、前掲書『日本近現代社會史』２９２頁。
[59]李卓、前掲書『日本近現代社會史』２９４頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

表者を選出することその他の団体行動を行うために自主的に労働組合を組織し、団結することを擁護すること並びに使用者と労働者との関係を規制する労働協約を締結するための団体交渉をすること及びその手続を助成することを目的とする。」と記されている[60]。労働者が労働組合を結成し、団体交渉やストライキなどの手段を行う、という権利が保障されることになったのである。

『労働関係調整法』においては、労働争議を予防し、または労働争議を解決するために、行政機関である労働委員会が、斡旋、調停、仲裁等で労働争議の調整をする、という手続きが定められた。また、同法により、運営状況が国民の生活、生計及び国家全体の経済発展に直接な影響を及ぼすという大企業や、特殊な性質を持つ企業に労働争議が起きた場合、総理大臣は「緊急調整」を決行する権限を持つに至った。緊急調整は、実質上、労働者のストライキを制限するもので、１９５２年１０月の吉田内閣による決行以外には、実行されたことがなかった[61]。

『労働基準法』は、三法の中で最も遅く１９４７年に施行された。同法は、戦前の『工場法』などの労働関連法令に修正を加えたもので、「労働条件は、労働者が人たるに値する生活を営むための必要を充たすべきものでなければならない。」がその主旨とされた[62]。また、労働契約の締結、給料、労働時間、労働保護、女性や未成年者への保護、有給休暇、労働災害保険などが具体的に規定された[63]。

労働三法により、労働者はかなりの程度で戦前より法的保障を得るようになった。しかし、戦後の日本社会は様々な問題に直面した。まずは人口問題である。終戦後、海外に駐屯していた軍隊や、旧植民地・占領地の住民の引揚げだけでなく、４５～４７年のベビーブームが大量な人口増加をもたらした。全国の総人口は、１９４５年１１月時点で７２００万ほどであったが、１９５０年には８３００万に上った[64]。この人口増加の現象は地方都市、農村地域において最も著しく見られる。総人口の増加は労働力人口の増加へとつながり、完全失業者数も１９４８年の２４万から１９５５年の７６万に増えた[65]。産業別で労働力人口増加の内訳を見ると、農業人口の大幅成長が見られ

---

[60]『労働組合法』第一章総則第一節
https://www.mhlw.go.jp/churoi/hourei/kumiaihou.html（最終閲覧日：２０２１/０４/１６）
[61]李卓、前掲書『日本近現代社會史』２９６頁。
[62] 『労働基準法』第一章総則第一節
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=73022000&dataType=0&pageNo=1、（最終閲覧日：２０２１/０４/１６）
[63]李卓、前掲書『日本近現代社會史』２９４頁。
[64] 安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』（岩波書店、２０１３）４７頁。
[65]李卓、前掲書『日本近現代社會史』２９７頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

る。農業人口は戦前には５５０万戸、３０００万人の水準にあったが、１９５０年には６２０万戸、３８００万人という日本史上の最大規模に達した。しかし、日本の農業人口は、戦前には既に「過剰」と判断されており、戦後急増した農業人口はなおさらのことである。農業経営の必要とする労働力の面からも、生計費の負担という面からも、明らかに人口過剰の現象が形成されたのであり、人々が農業に従事し続けた原因は、農業以外の就業の機会を伺いつつも、労働市場でつまづいたこともかなり多かったと見られる[66]。

もう一つ深刻な問題は、ハイパー・インフレーションである。具体的な数字で表すと、１９４９年の時点の卸売物価の水準は、１９３４～３６年間の２２０倍、１９４５年終戦前の７０倍であった[67]。これにより、食料を含めた多くの物資は闇市に流れ込み、特に戦争被害が酷かった大都市において多くの住民は路頭に迷い、タケノコ生活を送っていた。その対策として、GHQ と日本政府は預金の封鎖、新円への切り替え、円対ドルの為替相場の固定化や、金融緩和などを行った。

このように、戦後復興期において、日本社会で戦前の旧習が一掃され、より健全な労働環境を作るための改革が進められたが、戦争中の破壊で実際の状況は決して香ばしいものではなかった。

２、高度経済成長期

１９５０年、朝鮮戦争が勃発した。アメリカを始めとした西側の諸国は、日本を前進基地にし、物資調達、人員運送、軍備整備などを日本に委ねた。当時主な調達物資は、軍服・毛布・土嚢用麻袋・テントなどに使用される繊維製品、前線の陣地を構築するために必要な鋼管・針金・鉄条網などの各種鋼材、コンクリート材料、兵糧に使われる各種の食料品であった。そのため、日本の産業が直接的な影響を受けたのは、まず紡績業、金属工業、食品工業であった。また、軍需品の補充と整備のため、ＧＨＱは、日本企業に対して兵器や砲弾などの生産許可を下し、航空機と車両の修理を、戦前に戦車や戦闘機の生産を扱い技術的ノウハウを持っていた三菱重工、富士工業（現スバル）などの会社に依頼した。「朝鮮特需」と呼ばれるこの特需景気により、日本の製造業は活気を回復した[68]。

この特需景気に恵まれ、多くの企業は、輸出で獲得した外貨を資本にし、設備投資とそれによる生産の拡大を実現させた。また、戦後復興の一環とし

---

[66]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』４８頁。

[67]『後ハイパー・インフレと中央銀行』１頁。
https://www.imes.boj.or.jp/research/papers/japanese/kk31-1-7.pdf、（最終閲覧日：２０２１／０４／０８）

[68]大門正克、安田常雄、天野正子『戦後経験を生きる』（吉川弘文館、２００３）１００、１０１頁

DOI:10.6814/NCCU202100955

て、インフラストラクチャーの再整備も軌道に乗りつつあった。それは、労働者の賃金上昇、購買力の増大へとつながった。それで、日本の経済は製造業を軸に高度成長を達成し、全体的な規模拡大を遂げた。

こうした中、いよいよ１９５３年になると、一人当たりの実質国民所得、工業生産額、輸出額などの項目は、戦前の数字を上回った。１９５６年に経済企画庁が出版した『経済白書』の結語においては、「もはや戦後ではない」と記されている[69]。こうして日本社会は５０年代後半から高度成長期に入った。

このすさまじい好景気は、日本の初代天皇、神武天皇が即位して以来の好景気だという意味を込め、「神武景気」と呼ばれた。この好景気に浴び、多くの企業は経営規模を拡大する一方、他方で労働力の不足問題も顕在化するようになった。これに対して、大企業を始めとする企業側は終身雇用制を導入した。終身雇用制が導入された原因については、李卓は『日本近現代社会史』で以下の四点を挙げた[70]。

一、高度成長期の到来に応じ、多くの企業は生産規模と人員配置を拡大した。それにより、労働力が不足した。安定性を持つ労働力を確保するために、従業員と長期な雇用関係を結ぶ必要がある。
二、５０年代中期から、中央労働委員会は企業に対して労働条件につき労働組合と契約を締結するよう指令を出し、それにより従業員の解雇の流れなどは、企業側が労働組合と協議しなければならない、という必要事項になった。
三、裁判所が解雇に関する訴訟を審理する時、企業側が正当性のある解雇理由を明確に説明しなければいけない、という法律が制定された。
四、熟練工、技術者などが外部の人材市場では稀な存在であるため、社内で研修システムをたて、長期の教育訓練や人材育成に力を注ぐ、という重要性に企業は気づいた。

これらの要因を踏まえ、終身雇用的な関係を結ぶことは、明文化されていないものの、労使双方の間にはある程度のコンセンサスとなった。そして大企業が毎年新卒生を採用し、教育訓練を通じて、技術だけではなく会社への帰属意識も身に付けさせる、という流れが段々定着化した。同時に、年齢、学歴、勤続年数に応じて役職や賃金を上昇させる、という年功序列制も導入された。一方、正社員を補足する形で、農閑期の農家や主婦をパートタイム労働者として雇い入れる非正規雇用も増加した。経営困難に陥れた時、非正規雇用者は矢先に犠牲となり、正規雇用者である正社員は、比較的に保護さ

[69] 安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』４～６頁。
[70]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３００、３０１頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

れる立場に立った。非正規雇用と正規雇用の「二重構造」が、今後の日本社会の労働相を形成した[71]。終身雇用制下の正社員の安定性、年功序列制により自然に上がっていく賃金、それらに加えて教育訓練で植え付けられた会社への帰属意識、といった複合的な原因で、この時期の大企業の正規雇用者の多くは、長期にわたり同じ会社で勤務するようになった[72]。こうした、形成された大企業の正規労働者のあり方は、当時の日本社会において、「望ましい」生活者像の地位を与えられることになる。それ故、新規雇用の関係に入る新卒生にとって、この条件を満たす職場こそが、目指すべき目標となった[73]。

この時期の中小企業は、大企業並の待遇を従業員に提供することができなかった。中小企業の従業員の待遇、賃金、労働条件は、勤続年数などにより、労働市場の相場で決められることは多かったからである。そうとはいっても、中小企業も、可能な限り、大企業のように長期かつ安定な雇用関係を築こうと努力した。また、多くの中小企業は、大企業の下請けや仕入先などの形で、業務上、労働力を確保し運営を安定させた大企業と深い関係を有するため、大企業の日本経済全体へのプラス効果の恩恵を受けた[74]。

１９６０年、池田勇人内閣は「国民所得倍増計画」を打ち出した。この長期経済計画の目標は、１０年以内に GDP を年率９％以上に、国民総生産(GNP)を 26 兆円に倍増させ、国民の生活水準を西欧先進国並みに到達させる、ということである。結果として、日本は僅か７年間で国民所得を倍増させ、さらに１９６８年に西ドイツを越え、GDP 世界第 2 位の経済大国となった。そして所得倍増計画の十年間、GDP の年率は１０．９％であった[75]。国民の消費力も明らかに上昇した。国民が最も購入したい家電製品は、最初は「三種の神器」と呼ばれる電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビであったが、６０年代後半には「３C」と呼ばれる、自動車、クーラー、カラーテレビにかわった。日本民衆の生活感覚は「食」と「衣」の時代から「住」の時代へ転換した。それで、耐久消費財が経済能力、社会的地位を表すシンボルとなった[76]。

この状況の中で、５０年の朝鮮戦争、６４年の東京オリンピック、７０年の大阪万国博覧会、企業の日本式経営、政府の長期経済計画などの諸要因により、日本の経済は高度成長期を迎え、日本は経済大国に成り立った。同時に、「大企業の正社員」、「同じ企業で長く勤続した従業員」、「耐久消費

[71]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』１３頁。
[72]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０１頁。
[73]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』１４０頁。
[74]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０２頁。
[75]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』２１頁。
[76]大門正克、安田常雄、天野正子、前掲書『戦後経験を生きる』１２８頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

財」が望まれる、憧れの存在になった。この状況に対して、高岡裕之は『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』で以下の通りに述べている。

…社会の次元においてはこのような巨大な変化をもたらした高度成長期こそが、「戦前日本社会」が姿を消すと同時に、今日の私たちが暮らす「現代日本社会」の原型が確立した一大転換期であったからにほかならない[77]。

３、安定経済成長期

１９７３年、第四次中東戦争が勃発し、これによりグローバルな範囲でオイルショックが起こった。日本の経済はそれに巻き込まれ、大きな損害を受け、企業の終身雇用制と年功序列制も揺らいだ。この危機に対し、大企業はいくつかの手を打ち始めた。まずは「減量経営」である。減量経営において大事な一環は社内の人員調整である。人員調整は主にポスト、職務変更、出向、退職勧奨などの手段がある。子会社、グループ会社、関連会社などへの出向は主に中高年層の男性社員が対象となっている。出向させられた社員の賃金は、本来の会社か出向先の会社が支払い、またその社員は基本的に会社の運営状況が好転された後に原職に復帰できる[78]。退職勧奨は、早期退職優遇制度や希望退職募集などの手段があり、会社の要望に応じ、定年退職の年齢より早めに退職した従業員に対しより多くの退職金を支給する、ということである。退職した従業員は、独自で新たな事業を経営し始め、または転職するという考えがあれば、起業のための初期費用の一部を出資し、或いは転職先を紹介するなどのサポートを提供する企業もあった[79]。

人員調整のもう一つの側面は、非正規雇用を増やすことである。この時期の非正規労働者は、従来のパートタイム労働者だけでなく、契約社員や派遣社員もかなり増加した。この流れに乗り、７０年代に多くの派遣会社が現れた。そしてパートタイム労働者の数は１９７３年の２７８万、全体労働者の７．９％から１９８６年の５０３万、全体の１１．７％にも上った[80]。

企業の他にも、経済の安定を維持するために、政府は相応の施策を施した。政府は、７５年に『雇用保険法』、７８年に『特定不況地域離職者臨時措置法』といった新法を次々と制定した。これらの法律は、従業員の権益を守り、解雇の困難度とコストを上げることがその主旨であったが、大量に増加した派遣労働者を保障するための法律を制定するのは、１９８５年まで待たなくてはならなかった[81]。一方、１９７２年、自由民主党総裁選挙に勝利を収めた田中角栄は、政策綱領として「日本列島改造論」を提出した。日本列

[77]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』１３頁。
[78]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０２頁。
[79]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０３頁。
[80]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０３頁。
[81]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０４頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

島改造論の核心理念は、「工業再配置と交通・情報通信の全国的ネットワークの形成をテコにして、人とカネとものの流れを巨大都市から地方に逆流させる “地方分散” を推進すること」とされた[82]。実際に、田中内閣は、日本列島を高速道路・新幹線・本州四国連絡橋などの高速交通網で結び、地方の工業化を促進し、過疎と過密の問題と公害の問題を同時に解決するなどの課題に取り組んだ。この日本列島改造論により、列島改造ブームが起こり、高速道路などのインフラストラクチャーの他に、病院、学校、港などの公共施設も多く建てられた。このような大規模で継続的な公共投資は、地方の雇用、経済を潤わせることになった[83]

このような状況の中で、戦後のベビーブームで生まれた人々は、この時期になると２０～３５歳の年齢層となり、その多くは職に付き、家庭を持った。この人々たちは、「団塊の世代」と呼ばれ、数（約２５０万人）の膨大さにより、豊富な労働力の代表的な存在として、日本の経済成長を支える条件になったと広く認められている[84]。団塊の世代の多くは就職や進学で大都市圏に移動し、そして結婚して家庭を持ったらまたベッドタウン化する大都市周辺地区へ移動してゆく[85]。青年期に入った団塊の世代は既成文化、伝統文化に挑戦する傾向が強かった。服装におけるジーンズやミニスカート、音楽におけるロックバンド、フォークソングなどが、当時若者だった団塊の世代を表した身体的な「符号」である[86]。この現象について、藤村正之は『シリーズ戦後日本社会の歴史２：社会を消費する人びと』で以下のように述べている。

> *文化の面であれば、既成文化、伝統文化と一線を画す姿勢は、おとな文化への批判から、「対抗文化（counterculture）」と呼ばれた。それは、大衆文化一般から若者文化が「サブ．カルチャー」として独立した時期ともいえ、それを支えたのが団塊の世代の大人数によるマーケット拡大であった*[87]。

このように、安定成長期において、日本社会はオイルショックの衝撃を受けたが、高度経済成長期において形成された雇用制度が企業と政府の対策により守られてきた。しかし、正規労働者と非正規労働者の間の格差、学歴による格差、ジェンダーによる差別が、この時期から顕在化していった[88]。一方、若者文化は一般大衆文化から独立し、サブカルチャーとして位置づけされ始めた。

---

[82]田中角栄『日本列島改造論』（日刊工業新聞社、１９７２）２１６頁。
[83]中北浩爾『自民党政治の変容』（NHK 出版、２０１４）５７～５９頁。
[84]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』４６頁。
[85]安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史２：社会を消費する人びと』（岩波書店、２０１３）７６頁。
[86]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史２：社会を消費する人びと』７７頁。
[87]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史２：社会を消費する人びと』７７頁。
[88]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』１４２頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

４、バブル期とバブル崩壊後の現在

１９８５年、アメリカのニューヨークで、先進 5 ヵ国（G5）の首脳はプラザ合意を公表した。これにより、為替レートではドルが安く、円が高くなった。円高は輸出に不利になるため、日本政府は金融緩和政策に踏み切った。そのため、不動産と株市場は未曾有の活気を示し、多くの企業は海外への投資をも増加し、莫大な収益を得た。これは「バブル経済」と呼ばれる。そして企業は更なる事業規模の拡大、経営の多角化を進めるために、新卒生向けの募集人数を増やし、それに伴い、テレビで企業広告を行い、派手な企業パンフレットを作成・配布するといった手法を用い、そのため人材確保の競争も激しくなった。求人広告、人材派遣などに手掛ける株式会社リクルートホールディングスの調査では、バブル期の絶頂期に当たる１９９１年の大卒求人倍率は、2.86 倍（求人総数 84 万 400 人、民間企業就職希望者数 29 万 3800 人）に達した[89]。バブル期の新卒生にとって、就職は極めに簡単なことであったのである。

しかし、１９９０年、大蔵省は土地関連の融資を抑制するため、総量規制の政策を打ち出した。これにより、翌年以降、融資やローンの担保として使われた土地や住宅などの不動産の価格が急下落し、それに伴い日経平均株価も暴落した（バブル崩壊）。それにより、金融業を始めとする全体の産業は多大なダメージを受け、需要過剰から一転して供給過剰に転じ、企業倒産や不良債権、貸し倒れによる金融危機が高まるようになった[90]。そのため、多くの企業は雇用制度を調整せざるを得なかった。求人数の抑制や教育訓練・人材育成のためのコストの減少を図り、新たに職能資格制度を導入すると共に、安定成長期から導入された出向、非正規雇用や早期退職の範囲をさらに拡大し、終身雇用制と年功序列制の適用対象を減少した。これにより、従来の雇用形態は一変した。その結果、従業員は終身雇用の保障がなくなり、会社が長期にわたり安定した仕事を提供できるかどうかということに疑問を持ち始め、同一企業で長年働く意欲も低下した[91]。さらに、求人数の減少と非正規雇用の増加は、新卒生の就職困難度を一気に上げた。多くの新卒生は正社員になれず、非正規労働者として就労せざるを得ない羽目になった。非正規労働者の保障は一般的に正規労働者より少なく、より解雇されやすいため、非正規労働者の増加は、実質的に完全失業者と完全失業率の増加へとつながった。完全失業者は、１９９０年の時点で１３４万人だったが、１９９８年の時点で２９４万人にも上った[92]。

また、１９９７年の時点になると、それまで企業全体に８７．３％を占める多くの企業が導入していた職能資格制度は、年功序列制の代わりに、従業

[89] https://www.works-i.com/surveys/adoption/graduate.html（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[90]大門正克、安田常雄、天野正子、前掲書『戦後経験を生きる』２６７頁。
[91]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０６頁。
[92]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０７頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

員の処遇を決める主流な制度となった[93]。職能資格制度とは、職務遂行能力によって社員をいくつかの等級に分類し、賃金の管理を行うということであり[94]、その裏には能力主義、成果主義が働いている。この現象に対し、孫鋼麟は「日本企業における人的資源管理の研究―バブル経済崩壊後企業内人間関係」で以下のように述べている。

> *日本企業は１９９０年代以降長く続いた経済的悪化のもとで、まさしく経営の環境は急速に変化しつつある。従来の経営環境の変化のもとで、従来の「日本的経営」の企業間にどのような影響を及ぼしているのか、バブル崩壊後の激しい経営の進展のもとで、日本企業の多くの経営者は人件費コストを削減せざるを得ない窮地に迫られてきた。この結果、従来の雇用システムを持続することが困難な状況に至り、多くの日本企業は雇用慣行を置き換えせざるを得ない「成果主義」の時代がやってきた*[95]。

成果主義に基づいた評価制度がもたらしたのは、同一年齢層の従業員の間に給与の差が現れ、それは社会全体の格差へとつながった。１９９９年の時点では、４０歳の企業従業員の最高平均年収と最低平均年収の差は２００万に達した[96]。この格差は拡大する一方で、６０、７０年代では「一億総中流社会」と呼ばれた日本社会は、「格差社会」にかわった。厚生労働省が２０１９年に公表した２０１８年度の国民生活基礎調査の概況では、全世帯の平均年収は５５２万３千円であり、年収がこの平均値を下回る世帯は全体の６１．１％をも占めている[97]。格差社会は今もなお現在進行中である。

二十一世紀、グローバル化が進む中で、若者の多くは、団塊の世代の孫世代とされる「ポスト団塊ジュニア」、就職氷河期に当たる１９９０年代に卒業となった「ロスジェネ世代」や、ゆとり教育を受けた「ゆとり世代」に大きく分類されている。労働市場の「二重構造」が拡大し、若者を中心とする勤労貧乏層の「ワーキングプア」の増大が大きな問題となったが、それまで高齢者対策に重点を置いて整備されてきた社会保障は、こうした事態に対応できず、所得格差は戦後以来最も深刻になった[98]。このような若者の雇用環境悪化は、種々の問題を引き起こし、その中で深刻化しているのは自殺問題である。厚生労働省の自殺対策白書によると、２０１８年度で１０～４０歳の

---

[93]孫鋼麟「日本企業における人的資源管理の研究―バブル経済崩壊後企業内人間関係」（２０１１）３４頁。

[94] https://www.hrm-service.net/column/article35/（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

[95]孫鋼麟、前掲「日本企業における人的資源管理の研究―バブル経済崩壊後企業内人間関係」３３頁。

[96]李卓、前掲書『日本近現代社會史』３０６頁。

[97] https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/03.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

[98]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』２４２頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

各世代の死因の第一位になったのは自殺であり、動機が確認できた件数のうち、「勤務問題」、「経済、生活問題」が二位、三位を占めている[99]。

５、まとめ

以上のように、戦後から現在まで、日本の職場において広く存在する、戦後で形成された人間関係像は、以下の３点にまとめることができると考える。

（一）経済的、社会的地位が高い者の優位がさらに強化されたこと

高度経済成長期から、日本社会においては、「大企業の正社員」、「同じ企業で長く勤続した従業員」という身分が望ましい、憧れる標的となった。年功序列制の下で、いい役職と賃金を有する人は優秀な人物と見られた。特にバブル崩壊後に成果主義がより求められ、それに伴い格差の拡大により経済的、社会的地位が高い者が「有能者」とみられ、このようなイメージはさらに強化されたとも言えよう。

（二）「就職」と「いい仕事表現」の難易度、考え方が大分変った。

日本社会は、５０年代後半に始まった高度経済成長期から、９０年代初期のバブル崩壊が起きるまで、ずっと好景気に恵まれていた。そのため、その時の就職の難易度は現在のそれと遥かに違う。また、バブル崩壊後、多くの企業はコストを削減するために、教育訓練、人材育成をなるべく簡略化しようとした。それにより、新入社員、特に新卒生が初期の仕事表現において昔の先輩より未熟であることがありがちである。また、終身雇用制の適用範囲の縮小や、非正規雇用の拡大により、長年にわたって同じ企業で働くチャンスが減少された。しかし、これらの変化を無視した上で、**職に就けず、また仕事表現が評価されず**、または入社間もなく転職するといった若者に対して、「いまどきの若者は…」のような批判を行うこともしばしばある[100]。

（三）能力主義と成果主義の浸透化

１９９０年代に職能資格制度が本格的に取り入れられて以来、能力主義と成果主義が各職場に深く浸透した。独立行政法人労働政策研究・研修機構の調査では、２００５年の時点では、１０００人以上の大企業のうち、「個人業績を賃金に反映させる」企業は８３．４％に達し、規模と関係なくすべての企業においても５３．２％に上った[101]。そして同じ調査で、成果主義を導入した後の職場の変化について尋ねたところ、「精神的ストレスを訴える社

---

[99] https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/19-2/dl/1-3.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
https://www.mhlw.go.jp/content/r1h-2-3.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[100]安田常雄編、前掲書『シリーズ戦後日本社会の歴史２：社会を消費する人びと』６９頁。
[101] https://www.jil.go.jp/institute/reports/2006/documents/061.pdf ３６＆１６４頁。（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

DOI:10.6814/NCCU202100955

員が増加した」と答えた従業員は、５９．６％をも占めた。そこから、能力主義と成果主義は従業員の負担を生み出したことが伺える。

國立政治大學
National Chengchi University

DOI:10.6814/NCCU202100955

第二章　宮藤官九郎作品における人間関係像－

『ごめんね青春！』

一、創作の背景

『ごめんね青春！』は、ＴＢＳが２０１４年１０月１２日より放送を開始した、日曜テレビドラマである。本作は宮藤官九郎の脚本作で、第８３回ザ・テレビジョンドラマアカデミー賞２項目と２０１４年ギャラクシー賞２項目を受賞した[102]。『ごめんね青春！』のテンポは単純明快、キャラ設定は個性的であり、ロケ地の地方観光との連携は完璧である。運動会、恋愛、文化祭など、学園ドラマによく見られる要素も入っているが、全体的にはかなりな程度で他の学園ドラマと異なっている。

それは、『ごめんね青春！』の創作に関して、宮藤官九郎が、出版されたシナリオ集（KADOKAWA、２０１４）の前書きで、以下のようにこの作品に込めた思いと自分の心境を語ったことから、その一端が伺えよう。

> *「青春」という言葉に対して、懐かしさより、こっ恥ずかしさの方が先に立つのです。４４歳にもなってなに言ってんだかという話なんですが、青春が終わったことを、自分自身がまだ実感出来てないのではないか。だってまだ、夜中に大声で叫びたくなったり走りたくなったりするし、なんか無性に腹が立ったり、悔し泣きもするし。それらは、青春の真っ直中にいる若者にとっては、なんら特別ではない日常です。そういう青くささを俯瞰で眺め「青春してるな！」などと評することがかっこ悪いと思っていました。分かりづらいですか？大人が頭で考えて子供達に押し付けるような青春ドラマはやりたくないという意味です*[103]。

すなわち、宮藤が本作で描いた青春は、夢を追いかける熱血ものではなく、若さ故の悲しみ、苦しみでもなかった。『ごめんね青春！』における青春は、過ちを犯すのも、愛するのも、勝つのも、負けるのも、真剣になるのも、無我夢中になるのも、一切怖がらず、経験することである。結果はどうあれ、このすべてが将来に成長するための養分となるのである。

---

[102] https://houkon.jp/galaxyaward/%E7%AC%AC52%E5%9B%9E%EF%BC%882014%E5%B9%B4%E5%BA%A6%EF%BC%89/（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

[103] 宮藤官九郎、前掲書『ごめんね青春！』４頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

図１、『ごめんね青春！』の人物相関図

出典：（https://www.tbs.co.jp/gomenne_tbs/chart/より、最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

図 1 に示されるように、物語の中心は、進学校のカトリック系女子高校聖三島女学院(通称「三女」）と、成績が劣っている仏教系男子高校駒形大学付属三島高校（通称「東高」）の両校の合併計画である。両校の距離はただ１００メートルだが、三女は長年にわたり東高を蔑ろにしてきたため、お互いの関係は犬猿の仲である。合併し共学にすることがどのような、どれだけの影響をもたらすのかについて検証するために、実験として、両校からそれぞれ一つずつのクラスを選び出し、男子と女子を混合した特別共学クラス(３年

DOI:10.6814/NCCU202100955

Ｃ組と３年３組）をつくることになった。その上、両校から各自の一人の教師を派遣し、共学クラスの担任教員を担当させる。本作の主人公原平助（錦戸亮・演）は東高の教師であり、東高の出身者でもある。穏やかで温厚な平助は、共学クラスの担任教員として三女の３年Ｃ組に派遣された。一方、三女から東高の３年３組に派遣された担任教員は、三女出身者で、果敢で行動力が高い蜂矢りさ（満島ひかり・演）である。

特別共学クラスの男子生徒と女子生徒たちも、個性が溢れたキャラクターばかりである。例えば、日独ハーフ、体は男子、心は女子のトランスジェンダー、見た目はヤンキーだが、実は三島市の公式キャラクター・みしまるくんを演じている少年など。本作は、物語とキャラ設定においては、すでに劇的な要素が溢れているのである。また、このような状況の中で、生徒たちが如何にして自分と、馴染みのあるクラスメイトたちと随分異なった「新しい仲間」と付き合っていくのかについては、後述する第 2 話と第 3 話では主なイシューの一つとして触れることになる。

二、作品の内容分析

『ごめんね青春』第 2 話のタイトルは「お前しか見えない」である。第 2 話の物語は、一つのメインストーリーと一つのサブストーリーをめぐって展開されている。メインストーリーでは、それぞれ全くの新天地で特別共学クラスを担当し始めた平助とりさは、それまで男子校と女子校で遭遇していなかったハプニングに直面した。りさはなんとなく対処できたが、平助はかなり苦戦をしている。

サブストーリーはは生徒同士の物語である。最初から周りの目を盗んで付き合っている東高の生徒海老沢ゆずる（重岡大毅・演）と三女の生徒阿部あまり（森川葵・演）が、同じ特別共学クラスのクラスメイトとなった。しかし、三女の女子たちは「東高生との交際は厳しく禁ずる」という敵対性の持つ校則に従い、それによく東高の男子を見下すような態度を持っていることも加わって、海老沢と阿部は関係を明かすことができなかった。その挙句、二人は駆け落ちを企てた。駆け落ちの最中、二人は、東高同窓会長を務めている平助の父、原平太（風間杜夫役）にあい、平太は二人を学校に連れ戻した。このような大事件が起きたため、平助は特別共学クラスの生徒を集め、真剣に話をしようと考えた。

教室で、平助は自分の高校時代の出来事を生徒たちに語り掛けた。14 年前、東高と三女の関係はまだ今日ほど悪化しておらず、両校は合同で文化祭を開催することまで計画した。当時の文化祭実行委員会にも、周りを隠して交際している三女と東高の恋人同士がいた。文化祭の前夜、その二人は、三女の構内で密かにデートしたが、三女の礼拝堂で火事が起き、人為的な放火だと疑われた。火事の当時、唯一現場にいたこのカップルは容疑者リストか

DOI:10.6814/NCCU202100955

ら外されたが、東高と三女の生徒の間には、二人に関する悪い噂が流れ、あっという間に広がった。結局、その東高の男子は中退、三女の女子は家出をした。以下表 3 で挙げるシーンは、平助が以上の話を生徒たちに伝え終わった後のことである。

表３（『ごめんね青春！』７９、８０頁より）

シーン	三女特別共学クラス教室	時	日
キャラ	原平助、蜂矢りさ、特別共学クラスの生徒たち		
中井	結局先生が言いたい事は何ですか？		
平助	えっ？		
中井	東高生と三女生が付き合うと厄介なことになるって話ですか？ それとも高校生活で一回でもヘタ打ったら、二度と立ち直れないって話ですか？		
平助	いや、そういう意味じゃない。		
中井	じゃあどういう意味ですか？		
神保	つーかさ、結局犯人捕まったの？		
昭島	迷宮入りらしいよ。		
ビルケン	じゃあやっぱり、そのカップルが、放火しただな。		
平助	違う。		
古井	何だよ。自業自得って話か。		
平助	違う！先生が言いたかったのは、君達を縛りつける校則なんて、所詮そんなしょうもない理由で、大人が作ったものだってことだ。しょうもない君達の先輩がやらかした、たった一回のしょうもないヘマが原因で、君達は分断され、女子は男子を蔑み、男子は卑屈になり、どうせ東高、しょせん東高と精進を怠り、現在に至る。バカバカしいと思わないか？ ホントの理由も知らず、東高だから、三女だから、つきあえないなんて。むしろルールを破った海老沢と阿部さんの勇気をたたえたい。考えるきっかけを、与えてくれて、ありがとう。この機会に考えてみよう。ホントに男子が憎いか。女子がうっとうしいか。そう決めつけてるだけじゃないか。周りの意見に流されてないか？ 近すぎて見えてないんじゃないか？ 考えてくれ。お互い、向き合って。絶対いいところが見つかるはずだ。		
神保	見つからなかったらどうするんですか？		
中井	静かにして。茶化さないで。タレカッパの話最後まで聞こう。		
平助	ありがとう。うん。君達が、半年後に、ああ、 男女共学クラスでよかったなって、そう思える ように、先生も、頑張ります。うん。えっと…以上です。		

DOI:10.6814/NCCU202100955

特別共学クラスにいる中井貴子（黒島結菜・演）は、三女の生徒会長で、成績が優秀であるだけでなく、自分の主張と考えをもきちんと持っている。彼女は、最初から合併に対して強い反対意見を示し、自分が編入された特別共学クラスの担当教員の平助をも見下した態度で接し、しょっちゅう口答えをしていた。しかし、平助が交際禁止の校則について自分の考えを述べた後、中井は平助を見直し始めた。

その交際禁止令と、三女の生徒たちの東高への軽蔑は、日本の学園によく見られる現象である。前者は具体的に書面で書いてあり、また「伝統性」を持つ規則、制約などとして祭り上げられ、生徒たちの言動を束縛する役目を実際に発揮した。生徒たちは、ただそれに従えとしか教えられず、その背後にある制定の原因や意図を一切教えられていなかった。その交際禁止の校則は、前章で述べた理不尽な校則と同じく、現代の日本学園に悪影響を与えた。

また、この状況に対して、蒋氏は、著書『天使與魔鬼―日本教育面面觀』で、「日本社会全体に普遍的に存在している集団主義の影響により、学園においても集団から逸脱した人、ルールを破った人は異端と見なされ、攻撃される傾向がある」と指摘している[104]。このような状況に対して、平助は、自分と、周りの多数と違った人々は本当に悪いものなのか、またその人々への敵視はステレオタイプ性を帯びるものなのか、という疑問を発した上で、お互いの差異を尊重し、相手の利点を探し出すこそが正しい接し方だと認識した。このような平助の思いは生徒たちに伝わり、それにより特別共学クラスの男子と女子の関係は段々よくなっていった。宮藤はこのシーンで、特に表3 画線部の平助のセリフをもって、学園に存在する規則、制約に対する自分の思いを示したと思われる。

三女と東高の合併は第三話に入ってから大ピンチに直面した。第三話のタイトルは「運命の学力テスト!受験生必見!」だが、三女と東高は成績、偏差値や進学率などの多方面において差があまりにも大きすぎるゆえ、三女の校長吉井良江(斎藤由貴・演)は一つの条件を提出した。それは、次の学力テストで、東高の特別共学クラスは学年首位を取り、三女の特別共学クラスは学年最下位にならない、ということであった。その条件を満たさないと合併計画は即座に中止されることになる。りさが率いる東高の特別共学クラスにとって学年首位は難しいことではないが、平助の三女特別共学クラスにとって、学年最下位を避けるのは至難の業である。そこで、平助は共学スラスの女子たちに頭を下げ、男子たちに一対一の特別指導を行うようお願いした。この特別指導のおかけで、男子たちの成績が著しく上がったのみならず、教える側の女子たちの成績もさらなる進歩を見せた。しかし、奮闘の挙句、平助のクラスは学年最下位の運命から逃げられなかった。そこで三女の校長先

[104]蒋豊、前掲書『天使與魔鬼-日本教育面面觀』２６０頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

生は合併中止を宣言し、平助に対して、男子たちを連れて女子たちに最後の別れをするようと告げた。次のシーンは、表４のような別れの場面である。

表４、（『ごめんね青春！』１０８、１０９頁より）

シーン	三女特別共学クラス教室	時	日
キャラ	原平助、蜂矢りさ、特別共学クラスの生徒たち		
平助	結局、ひと月ともたなかったし、合同文化祭も、幻に終わったけど。楽しかった。もう、お互い知らない仲じゃないんだし、今後、駅とか、イズッパコ[105]の中で、会ったら、無視せず、挨拶ぐらいして下さい。さて、最後に何か一つ、残していきたいんだけど。急すぎて、こんなのしか。思いつかない。		
	（と、黒板に「人」と書く平助）		
遠藤	まさか金八？		
昭島	人という字は、人と人が支えあって…。		
平助	あれ嘘です。		
昭島	はあ…		
	（「人」の象形文字を書く平助）		
平助	象形文字の「人」はね、一人で立ってます。あっ、じゃあ遠藤さん。これ何て読む？		
	（「女子」と書く平助）		
遠藤	好き。		
平助	うん、そう。「女子」と書いて、「好き」、「好む」と読みます。これも象形文字だな。もともとは、女性が、子供を抱いている姿は、好ましいっていうのが由来です。今、こんなこと言ったら、女性差別なんて、言われちゃうけどね。あ、じゃあ、ビルケン、 これ何て読む？		
	（「男子」と書く平助）		
ビルケン	騙されないよ。こんな漢字、ないよ。		
平助	そう。「男子」と書いても、他に、読みようがない。でも、もしこういう漢字があったら、君たち、何て読む？ 中井さん。		
中井	ばか。		
平助	…いきなりベストアンサー出ちゃったよ（笑）他には？		
	（「エロい」、「汚い」、「うるさい」など答えが出る。チャイムが鳴る。		
平助	ああ、終わりだ。じゃあ、これは宿題です。		
神保	えっ？ いつまでだよ？		

[105]本作の舞台である静岡にある伊豆箱根鉄道の愛称。

DOI:10.6814/NCCU202100955

平助	いつでもいいよ。答え分かったら、言いに来てくれ。起立！ 男子、前来い！ 短い間でしたけど、ありがとうございました。
東高生全体	ありがとうございました。

別れの後、東高の男子たちは悔しい涙を浮かべながら平助と共に三女を出た。しかし、その翌日、不思議なことが起きた。東高特別共学クラスに所属した女子たちは、相変わらず東高に来た。これを目の前に見た三女特別クラスに所属した男子たちも、三女に駆けつけた。平助は彼らを追って三女特別共学クラスに着き、りさと三女の校長先生にすぐ男子たちを連れ戻せと言われた突端、生徒会長の中井は、平助に早く授業を始めようと促し、女子たちの「合併してもよい」というコンセンサスを得たことを伝えた。意外な展開に驚いているりさと三女の校長先生の前に、中井は黒板に「女子」と「男子」の字を書き、平助に宿題の回答を出した。それは、女子たちが「男子」の読みを「あり」としたことであった。この一件が落着した後、特別共学クラスが続行できるようになり、男子と女子は本当の意味で一丸となった。

表 4 の画線部のセリフに示されるような、昭島が言及した「人」という文字に対する解釈の仕方は、20 世紀代表的な学園ドラマ『3 年 B 組金八先生』（TBS 系、１９７９）シリーズに由来し、日本の学園に広く見られる人間関係像を象徴した著しい一例と見られる。つまり、「人は人と支え合わなければいけない」という、前章で述べた、集団主義を重視する考え方を具体化したものである。そして、昭島がこの名セリフを物まねして再現しようとしているところに、平助は単刀直入に「あれ嘘です」と指摘した。これは、宮藤の世間一般の価値観への批判と見られる。そして宮藤はこの後の物語の展開に自らの考えを込めたと見受けられる。それは、お互いへの理解を深めれば、集団の中に多数派と違った異例な存在がいても、別に悪くはないということである。中井と三女の生徒たちが「男子」の読みに対し出した答えが、この精神の象徴だと思われる。

学園生活における、自分たちと違った他者の受容に関して、この作品の中には、もう一つの具体的な例がある。それは東高生の村井守（小関裕太役）である。守の父は東高理事長であり、同作品の冒頭で、平助と共に三女の特別共学クラスに移動した。守は元々心が女子であるトランスジェンダー（性同一性障害）であり、三女の特別クラスに入ってから、三女の制服を着用したり、女子用鞄とぬいぐるみを手に持ったり、次第にありのままの自分を表に出すようになった。守は自宅ではずっと男として振舞っていたが、女装で登校している。それは父の村井晋太郎（津田寛治）にばれてしまい、晋太郎は怒りのあまりに、三女との合併を中止すると宣言した。平助とりさは、村井親子の対立を解消するために、色々と手を掛けた。そのおかげで、晋太郎は自分のステレオタイプ的な考えを捨て、ようやく守の性的志向を受け入れるようになった。

DOI:10.6814/NCCU202100955

ここまで、宮藤が多くのシーンを割いて晋太郎と守の関係を描いたことについて分析していたが、次に、視点をそこから移し、守のキャンパスライフに注目したい。前章での探究から、日本学園におけるいじめ、自分たちと違った他者への敵視の現状が分かった。その中、性的志向を原因とするいじめの現状に関する考察は、日本性教育協会(JASE) が 2018 年 8 月１５日に発行した『現代性教育研究ジャーナル』でトランスジェンダーを含む LGBT のいじめ被害、不登校、自傷行為の経験率について調査を行ったところ、「これまでの学校生活（小・中・高）で、いじめられたことがありますか？」という質問に対し、全世代（１０代～５０歳以上）の回答者は合計で１５０６４名あり、そのうち、58.2%の人がいじめられた経験があると答えた[106]。現実の日本の学校では、LGBT が極めに弱い立場に立たされていることが、明白のことである。しかし、『ごめんね青春』の世界では、そうではなかった。東高と三女との合併により、守は公に女装し始め、そして自分の性的指向をカミングアウトするようになったが、そのずっと前から東高の男子と三女の女子は守がトランスジェンダーであることを知っていた。男子も女子も守に他のクラスメイトと同じような態度で接し、守はいじめられるどころか、むしろ人気者であった。守は、東高と三女の合同文化祭「青春祭」で、模擬店「青春カフェ」のウェイトレスとして接客し、そして青春祭の閉会式で初代ミス青春に選ばれた。村井親子の間の衝突に比べ、守のキャンパスライフは充実しているように映られる。

男子高の生徒がトランスジェンダーであることは、非常にドラマチックなキャラ設定であり、そこから生まれた衝突と物語はドラマ全体の質を向上した。トランスジェンダーが学校生活の中で遭った衝突は実際に多いが、宮藤はあえて衝突の場面を親子の間に限定している。もし守は出番が少ない、もしくは成長・変化のない、単なるフラットキャラクターであれば、キャラ設定を最大限に活用しなくてもおかしくはないが、丸一話をかけて主要人物として描写したという守に対して、宮藤は、何故現実の状況と一致し、しかも最もドラ性が生まれるキャラストーリーの展開（トランスジェンダーが学校生活でのいじめを受けるという展開）を行わなかったのか。それは、宮藤が学校生活における人間関係の理想像、及び本作の視聴者に伝えたい思いと密接に関わると考える。前述の『ごめんね青春！』シナリオ集の前書きで、宮藤は、「大人が頭で考えて子供達に押し付けるような青春ドラマはやりたくない」と述べた[107]。もしトランスジェンダーのイシューの扱い方が、「守は学校で不公平な待遇、差別に遭い→平助とりさに気づかれ→平助とりさは守を助け、生徒たちに正しい観念を伝える」という流れになると、「大人」の平助たちは「子供」の生徒たちに「押し付ける」ことになってしまう。正し

[106] https://www.jase.faje.or.jp/jigyo/journal/seikyoiku_journal_201808.pdf、４頁。（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）
[107] 宮藤官九郎、前掲書『ごめんね青春！』４頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

くすべきことは何かということを、セリフで教えるよりは、むしろ実際の手本を見せた方がいい。そのため、宮藤は守に関する学校の人間関係を理想的に描き、現実とは違ったクラスメイトへの理想的な接し方を提示したのである。

しかも、宮藤は、ステレオタイプ的な描写を回避しようとしたとも考える。確かに統計上、トランスジェンダーが学校でいじめ、差別を受けている確率は高いが、すべてのクラスにおいては決してそのような現象が見られるとは限らない。作品において、そのような展開を描いたら、「トランスジェンダーの学園生活はいじめと差別ばかりだ」というステレオタイプを視聴者に伝えてしまい、トランスジェンダーへの理解が負の方向へ定型化される可能性が十分ある。このような負の影響を回避し、そして「理解し合えば、トランスジェンダーのような「特別」な存在も「一般」の生徒たちと同じように、充実して楽しい学園と家庭生活を送ることができる」というメッセージに焦点を絞るため、宮藤は、守に関する物語を、敢えて現実とは違った方向に描いたのである。

本作におけるもう一つ大事な要素は、「ごめんね」である。これについて、宮藤はシナリオ集の前書きで次のように記している。

> *なるほど。これは大人も子供も自分の青春に「ごめんね」するドラマなんだな。脚本家が今さら言うことじゃないですが、大きな罪を抱えた平助だけでなく、生徒、あるいは周囲の大人たちも、小さな「ごめんね」を抱え、青春を引きずっている。その「ごめんね」の受け皿として、三女の懺悔室があり、カバヤキ三太郎がいる。そして大きな「ごめんね」を抱えた平助だからこそ解る痛みや苦しみがあり、彼にしか言えない言葉がある。そう考えたら、すごく良いタイトルのような気がしてきました*[108]。

宮藤が述べたように、本作に登場しているキャラクターたちは、それぞれの過ちや、謝りたいことを抱えている。平助の場合は、14 年前の放火事件と、りさの姉かつ自分の片思いの相手だった蜂矢祐子（波瑠役）への罪悪感である。14 年前、祐子は合同文化祭実行委員会三女側の生徒代表で、平助の親友の蔦谷サトシ（永山絢斗役）は東高側の生徒代表であった。サトシは、平助が祐子への思いをわかっていながら、密かに祐子と付き合い始めた。文化祭の前夜、サトシと祐子は三女の屋上でデートした。そして隣の東高の屋上にいる平助は、二人が濃厚なキスをしているところを目撃した。親友に裏切られた平助は、怒りのあまりに、東高の屋上から三女へロケット花火 20 発以上を打ち込んだ。平助はそのまま家に帰った後、三女の礼拝堂に火事が起きたことを知り、自分が放った花火が原因だと思い込んだ。火事の後、祐子とサトシが遭った境遇も自分のせいにし、己を咎めていた。

[108]宮藤官九郎、前掲書『ごめんね青春！』５頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

それから 14 年が経ち、三女と東高は再び合同文化祭を開催することになった。三女と東高が合併後の校名は「聖駿高校」で、その新しい校名の発音から、合同文化祭は「青春祭」と名付けられた。文化祭の前夜に、ずっと行方不明になっていた裕子は、急に東高の校長室に姿を現した。裕子は家出をした後、転々して出版業界に入り、今は YUKO というペンネームでフリーライターとして活躍している。三女と東高が再び合同文化祭を開催することを知り、久しぶりに故郷、そして母校に帰った。裕子の出現は平助を激しく動揺させた。青春祭の閉会式において、平助は、初代ミスター青春に選ばれ、受賞コメントの場を借りて、自分が１４年前の放火犯であることを、礼拝堂にいる全員に告白した。これからのシーンは、表 5 に見られるような、告白した後の場面である。

表５（『ごめんね青春！』３１１、３１２頁より）

シーン	三女大礼拝堂	時	夜
キャラ	原平助、蜂矢りさ、蔦谷サトシ、特別共学クラスの生徒たち（神保、大木、佐久間、阿部、半田、村井、遠藤、古井、ビルケン）、三女と東高の職員たち（吉井、三宮、浜口、豪徳寺、淡島）。		
吉井	なぜ、名乗り出なかったのですか？		
平助	...		
吉井	素直に罪を認めて出頭しようと思わなかったですか？		
平助	.....何度も、交番の前まで行きました.....でも、足がすくんで.....		
吉井	罰を受けるのが怖かったんですか？		
平助	...はい。でも、それだけではありません。		
吉井	何ですか？ 正直に言いなさい！		
平助	学校が好きだったんです。		
	（拍子抜けしてざわつく生徒たち）		
平助	東高が好きだったんです！ いずっぱこも、あくびしながら、みんなで唱える般若心経も、月に 1 回の説法も、売店のパンも、コーヒー牛乳も、保健室も、どんまい先生も、大好きだったんです。全部、俺の青春なんです。		
淡島	平ちゃん...		
平助	俺のせいで中止になった、合同文化祭、みんなの夢だった男女共学、叶えるまで、学校に居たかった。いや、居なくちゃいけない。そう考えるようになりました。そのためには・・・		
浜口	教師になるしかないと。		
平助	はい。		

DOI:10.6814/NCCU202100955

豪徳寺	それで教員試験受けて。
平助	教師になりました。全て、成し遂げたら、告白するつもりでいました。結果、14 年、かかりました。この年まで、ズルズル、青春を引きずってしまいました。
吉井	合併を実現させ、合同文化祭を成功させ、それで罪を償ったとお考えですか？そんなのは思い上がりです。
平助	…はい。
吉井	世間を欺き、生徒を欺き、神や仏を欺き、そして、自らをも欺いて来た 14 年間です。そんなもの正当化してはいけません。
神保	（隣の大木に）別によくない？
吉井	きちんと贖罪すべきです。
平助	仰る通りです。放火の罪は、決して消えません。責任を取って、教師を…
吉井	（遮り）今何か言いました？ そこのチンチクリン。
神保	いや神保っす。いや、何でもないっす。
大木	別によくない？って言ってました。
りさ	神保さん、何がいいの？
神保	だってうちらもう仲悪くないし。平ちゃん先生が犯人でも違くても、どっちでもいいかなって。
浜口	何言ってるの。仮にも教師が放火した…
神保	教師が放火した訳じゃねぇっしょ。放火魔が、教師になったんでしょ。
佐久間	どっちにしろ、14 年前って、うちらまだ４才だもんね。
阿部	どっちでもいい。
大木	平ちゃんが担任じゃなかったら、合併も、青春祭もなかった訳だし。そっちの方が切実だよな。
半田	僕らの代で合併できて、ラッキーだったと思います。
村井	楽しかったもんね。
平助	…お前ら
遠藤	まあ、どうしても辞めるっつうなら、別に止めないけど。
古井	どうせ俺ら、卒業だしな
ビルケン	あっ、３月で辞めて、東京で三島コロッケのお店をやったらいいよ。
平助	いや、先生、今日限り辞めます。突然だけど、教師になるときから、決めてたことだから。
三宮	そうはさせない！
	三宮に続いて、制服の警官とサトシが来る。騒然とする生徒たち。平助も覚悟し身構える。

DOI:10.6814/NCCU202100955

吉井	何、また腐ったミカン？
三宮	違う違う。この方々は、原先生の無実を、証明してくれる人達。
平助	はっ？
サトシ	べーやん！ 俺さ、またいい知らせ持って来ちゃったかも！
三宮	ここじゃなんだから、校長室。お父さんたちも来てるから。

この先の展開は平助の無実を証明し、ハッピーエンドの結末を迎えたが、ここでこの展開における生徒たちの反応に注目したい。平助の犯罪の告白に対し、職員たちの全員は一応批判的な態度を示したが、その逆に、生徒たちはそろって平助の罪を受け入れ、寛大さを見せた。「過ちを犯した人に罰を与え、償いを求める」ということが、学園における一般的な原則で、三女の校長吉井を始めとする職員たちが平助に対して取った態度でもある。それとは対照的に、三女と東高の生徒たちは真逆な態度を示した。本作では、生徒たちの多くも過ち、ミスを犯したことがある。彼らは、それぞれ違った形で「ごめんね」をして、理解や許しをもらい、己を解放できた。青春時代に犯した過ちへの咎めに引きずられ、長い間己を縛り続けてきた平助に対し、生徒たちは解放への道を案内したのである。このシーンを通して、宮藤は青春時代の中に犯した「若さ故の過ち」に対し取るべき姿勢を描いたのである。

本作の最後に、男子と女子生徒が協力して作り（現実での作詞は宮藤）、文化祭で披露した聖駿高校の校歌を載せる[109]。

ひかりは止まる　のぞみは通過
水の都 新緑の匂い
友と語らう　コロッケの味
ゆっくり走る　駿豆線
ガタゴト走る　いずっぱこ
ある日　神さまと　仏さまが　仲直り
それが　青春の始まりでした

神に誓って　知らめが仏
いろいろあったね　聖駿高校
悔い改めて　悟れよ自分
僕の　私の　青春そのもの

校歌の歌詞には、性質が完全異なった両者が理解し合う「ある日神さまと仏さまが仲直り」、本作の核心要素である「ごめんね」を含めた「悔い改め

[109] 宮藤官九郎、前掲書『ごめんね青春！』３２３頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

て悟れよ自分」、この全てが「僕の、私の青春そのもの」である、という要素がある。宮藤は本作を総括するような歌詞を作り、この校歌を物語の終盤に登場させた。この校歌は、作品の中の生徒たちの経歴、成長であり、宮藤自身の思いの表しでもある。

全体的に言うと、宮藤が『ごめんね青春！』で描いた価値観や人間関係像は、それまで広く見られた学園でのそれと異なっているが、その特徴は、以下の四点にまとめることができると考える。

1. 既成の体制や伝統にぶつかることは必ずしも悪いことではない。

海老沢と阿部の校則違反を通じて、平助は生徒に自分の思いを伝えた。さらに規則を破った二人に「むしろルールを破った海老沢と阿部さんの勇気をたたえたい。考えるきっかけを、与えてくれて、ありがとう」という言葉を言い出した。背後の原因もしらず、ただひたすらに守るより、規則にぶつかる、破ることは必ずしも悪いことではないという思いを宮藤が示した。

2. 敵視の根本的な原因は相互理解が足りないことにある、という場合が多い。

三女の女子たちは思わず「男子」の読みを「バカ」、「エロい」、「汚い」、「うるさい」などにしたことで、東高の男子への軽蔑を表した。しかし、平助が表３のシーンで言った「周りの意見に流されてないか？ 近すぎて見えてないんじゃないか？ 考えてくれ。お互い、向き合って。絶対いいところが見つかるはずだ」という言葉と、個別指導を通じて東高の男子への理解を深めたことで、女子たちが考えて出した答えは「『男子』はあり」であった。敵視は理解不足によるものが多く、理解を深めば解けられる、という思いを宮藤は示したのである。

3. 人間はそれぞれが独自性を持つ一個人であるため、差異を尊重すべきである。

「人」の文字に対する解釈は集団主義への宮藤の批判で、守の生き様は宮藤が考えている、独自性を持つ一個人が送るべき理想的な学園生活像である。前章で述べた現実の学校において今もなお存在している集団主義と一斉主義のようなやり方ではなく、むしろ、個の差異と独自性を尊重し、トランスジェンダーも誰も楽しくいられる学校生活こそが、宮藤が学校の人間関係に対する理想像である。

4. 青春時代に皆は過ちを犯すが、その過ちに引きずられる必要がない。反省はすべきだが、許されるべきでもある。

前章で述べたように、現実的には、「生徒」という身分にかけた固有イメージと校則への服従要求が、過ちによる「罰」への強調をもたらした。本作の主人公平助は、学生時代に犯した過ちに長く引きずった。そして、最終話の大礼拝堂でのシーンで平助は告白して、過ちから解放された。聖駿高校の校歌の歌詞のように、青春には悔いあるが、それを改め、悟り、そして「ごめんね」をしてから、本当の成長と次の段階へ歩き出す動力が生み出せる。宮藤は「罰」より「許す」と「解放」、「成長」を強調したのである。

DOI:10.6814/NCCU202100955

第三章　宮藤官九郎作品における人間関係像－『ゆとりですがなにか』

一、創作の背景

『ゆとりですがなにか』は、日本テレビが２０１６年４月１７日から放送した日曜ドラマである。本作は宮藤官九郎の脚本作で、第８９回ザテレビジョンドラマアカデミー賞で三部門受賞、東京国際ドラマフェスティバルで優秀賞などの受賞歴があり、宮藤自身も本作の成果により、第６７回芸術選奨文部科学大臣賞放送部門を受賞した[110]。タイトルの「ゆとり」とは、２００２年から実施され始めた「ゆとり教育」を受けた、１９８７～２００４年生まれの若者のことを指し、その世代は「ゆとり世代」とも呼ばれている。ゆとり教育の中心理念は、それまで知識量を偏重した「詰め込み教育」を改め、思考力を鍛えるための学習に重心を置いた、経験重視型の教育方針をもって、学習時間と内容を減らしてゆとりのある学校教育を目指す、ということである。しかし、それにより、生徒の学習力と学習態度が低下し、また卒業後に職場での仕事能力と競争力も前の世代に劣るなど、批判の声が世間から相次いで出てきた[111]。本作は、そんな「ゆとり世代」を主人公にし、ゆとりの視点から、現代日本における若者たちが直面する様々な問題について描写したものである。

『ゆとりですがなにか』の創作に関して、宮藤官九郎は、自らのシナリオ集（KADOKAWA、２０１６）で、この作品に込めた思いと自分の心境、特に「ゆとり世代」を取り上げた経緯に焦点を絞って次のように語っている。

> *時は流れ、自分も紛う事なき中年になり、何の疑問も抵抗もなく「最近の若いやつらって」と口にするようになりました。同時期、いろんな現場で「すみません、自分ゆとりなんで」という言葉を耳にするようになった。気がついたら劇団の新人も、撮影現場の助監督も、行きつけのカフェの店員も、みな２０も下の若者だった。彼らの口から出る「ゆとりなんで」と俺が発する「最近の若い奴らって」、実は同義語なんじゃないか。世代間の思考停止を招く呪いの言葉なんじゃないか。考えるのを諦めず、ひたすら掘り下げたら何か見つかるんじゃないか。そして何より、これは俺のアナザーサイドをご開帳するチャンスかも知れないと直感し、水田さん[112]に短いプロットを書いて送りました[113]。*

そこから分かるように、宮藤は本作を「自分のアナザーサイドの開帳 」と

---

[110] https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/2017030801_besshi.pdf（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

[111] https://diamond.jp/articles/-/6831（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

[112]本作の監督を務める水田伸生のことである。

[113]宮藤官九郎、前掲書『ゆとりですがなにか』3 頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

して位置づけている。彼は、シナリオ集の前書きで「俺の書く脚本が、わちゃわちゃした画面を欲していたのです」と記しているように、作品の中でコメディ性を重視してきたが、本作では、今までのこだわりをいったん置いとき、以下の新たな三つの原則で創作に取り組んだ[114]。
１、ギャグで悩まない
２、ギミックを使わない
３、プロットを書かない

これらの原則で作られた『ゆとりですかなにか』は、深刻な社会問題、現象をテーマとして扱っているのに、重みと息苦しさがあまり感じられない、多くの社会派ドラマと一味違った新感覚の社会派ドラマとして、宮藤作品の中でも異色な存在となったと思われる。

二、あらすじ

本作の主人公である坂間正和（岡田将生・演）は、１９８７年生まれの「ゆとり第一世代」であった。実家は酒造を経営しているが、経営役は兄夫婦で担い、正和自身は食品会社で働いている。正和は、最初は、ミスを犯した時、よく上司に「これだからゆとりは！」と責められ、「ゆとり」の真の意味でさえも知らず、褒め言葉だと勘違いしていた。しかし、このような彼は、「レンタルおっさん」という悩み相談サービスで麻生さん（吉田鋼太郎・演）に出会い、麻生から「ゆとり」が差別用語に近いマイナス言葉であるということを知らされたら、ショックを受けてしまった。落ち込んだ正和は、その後、道で自分と同じく１９８７年生まれの山路一豊（松坂桃李・演）と知り合い、山路は小学校の教師であり、職場で同じく「ゆとり」のレッテルを貼られた。同様な境遇を共有している初対面の二人は、すぐに打ち解けることができたが、そこに街で客引きをしてるチンピラの道上まりぶ（柳楽優弥・演）が現れ、正和と山路を言葉巧みにぼったくりバーに勧誘した。この後、一連のハプニングで正和、山路、まりぶ三人のゆとり世代の間には、友情の種が芽生えた。

本作においては、全作品を貫くメインストーリーがなく、三人の主要キャラクターの周りに様々なハプニングと衝突が起きつつ、物語が進行していく。ゆとり世代が世間の厳しい目にさらされる大きな要因の一つは、日本社会に溢れた能力主義である。前の世代から見て、ゆとり世代の若者は、甘えすぎる学園生活を送ってきたため、きちんと自分の専門スキルを育ててこなかった。そのような若者は、やがて社会人になった後、職場で厳しい指導に耐えきれず、仕事をすぐ辞めると、「やはりゆとりのストレス耐性は不足だ」と言われ、笑われる。しかし、こうして一世代の若者全体にレッテルを貼ることは果たして正しいのか、仕事能力だけで人を評価することは本当に

[114]宮藤官九郎、前掲書『ゆとりですがなにか』４頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

正しいのか、このような人間関係像は果たして健全なものなのか、といった問いは、宮藤官九郎が本作にわたって問いかけたイシューである。このことについて、次節の内容分析でさらに深く議論する。

三、作品の内容分析

前述したように、宮藤官九郎は「ゆとり」という名詞を「世代間の思考停止を招く呪いの言葉」としている。主人公たちの「ゆとり世代」の対極的存在として、本作には、バブル経済に恵まれた前の世代に属している二人のキャラが登場している。それは、道上まりぶの父で、「麻生」という偽名を使った道上巌、及び正和の直属上司の早川道郎（手塚とおる役）である。

『ゆとりですがなにか』第 1 話の最初のシーンは、正和と麻生の会話であった。正和は、職場で会社傘下の焼き鳥専門店「鳥民」に出向させられ、「ゆとりモンスター」と言われる後輩の山岸ひろむ（太賀・演）に仕事のペースをかき乱されたり、そのため落ち込んだところに、偶然「レンタルおっさん」という悩み相談サービスの情報を目にし、そこを訪ねると決めた。そこへやって来たのは麻生さんである。実は山路も同様に「レンタルおっさん」を利用しており、当時やって来たのも麻生さんだった。

道上まりぶは、正和と山路を「ぼったくり」する時、自分が山路の学生時代の登山部の仲間だったと偽り、二人を騙した。山路は、まりぶは何故あんなに個人情報までを詳しく知っているのかについて、考えている時、偶然麻生さんがまりぶと接触しているところを目撃した。以下の表 6 は、第２話「あんたの正義は一体なんだ？」の中の、山路と正和が麻生さんを問い詰めるシーンである。

表６（『ゆとりですがなにか』５２～５４頁より）

シーン	並木道	時	朝
キャラ	坂間正和、山路一豊、麻生さん		
	（神妙な面持ちの麻生さん、正和と山路に詰め寄られ。）		
麻生	申し訳ございません！		
正和	いやいやいや…！えっ、親子？ そんな…。		
麻生	あの…あいつが高校へ上がる時、妻と離婚しまして。それ以来、あいつとは一緒に暮らしてはいません。時々、小遣いせびりに来るぐらいで。		
山路	そのついでに僕の個人情報を盗み見たと？		
麻生	おそらく。あの、この間お会いした時、実は、		

DOI:10.6814/NCCU202100955

	いたんです。山路さんは、利用回数も多いので、その～せがれと、ニアミスした時に、何ていますか、その、だましやすいと思って…
山路	はぁ？
麻生	目を付けたんではないかと。あの、本当に、申し訳ありませんでした！どうかこれ…お納めください。
正和	もう少し詳しく聞かせてください。
麻生	あの、せがれのことですか？
正和	麻生さんのことも。
麻生	あ～そう。
山路	ふざけてるんですか？
麻生	いえいえ、決してそのようなことは。まず…。麻生というのは…偽名です。本名は、道上と申します。元不動産屋で、**バブル絶頂期の３０歳の時に起業しました。**今は、その経験を生かして、フリーの、企業カウンセラーの傍ら、レンタルおじさんに登録してます。
山路	悠々自適だ。
麻生	ハッハッハッハ…いえいえ、そんな。
正和	息子さんは？
麻生	道上まりぶは、お２人と同じ、１９８７年、ゆとり第一世代です。中学の時は、神童と呼ばれてました。名門私立中学に首席で合格しましてね。ただ、離婚してからは、妻が、過剰な期待をかけ過ぎたせいでしょうか。結果、それがプレッシャーとなり……
	（中略）
正和	親に償ってもらうのは筋が違います。ガキじゃあるまいし。自分で片つけるんで、息子さんの連絡先教えてください。
麻生	それは個人情報なんで…
正和	まだかばうんですか？ あんなヤツ。親なら叱りつけたらどうですか。あんなクズみたいなヤツ。
山路	坂間さん…
正和	クズでしょ？ 俺も、山ちゃんも、あんたの息子も！
麻生	いや、だって…

DOI:10.6814/NCCU202100955

正和	だけどみんな違う。クズだけど、それぞれ違うクズなんだから。ゆとりなんて言葉でくくらないで下さい。若者の相談に乗って分かった気になって、小遣稼いでる暇あったらてめえの息子ぐらいちゃんと叱ってください！

麻生さんは、物語の冒頭において、スタイルがよく、人生の知恵も溢れている、裕福層の中年男性のように描かれているが、実は本作において最もまともではないキャラクターである。彼が今の暮らしを保つことができたのは、自分の努力か才能のおかげではなく、バブル経済の浪に乗っただけだからである。その上、不倫の常連犯で、まりぶを不幸にさせた張本人でもある。宮藤は、画線部のセリフに見られるように、敢えて「麻生さんはバブル絶頂期に起業した」という設定を明言した。それは、前章で言及した、高度経済成長期からバブル期までの就職難易度と、現代のゆとり世代が直面する就職難の差を強調するためである。

もう一人の前の世代の代表者は、正和の直属上司の早川課長である。麻生より、早川課長は、さらにフラットキャラクター的な存在で、出番もセリフも多くなく、心境の描写が乏しい存在である。しかし、彼は、物語の進展に重要な影響を与えた。最初に「ゆとり」をマイナスの意味で主人公たちに使ったのは、早川課長である。彼は、しょっちゅうミスを起こしてしまう正和に対し、ちゃんとしている前の世代を代表したような姿勢で正和を叱った。本作の前半の描写では、早川課長は厳しいだけではなく、頼もしく、決断力とリーダーシップも持っている素晴らしい上司である。早川課長は、正和にとって、ある程度憧れの存在でもある。しかし、正和が同じ職場で働き、長年付き合っている彼女の宮下茜（安藤サクラ役）と一旦別れた時、早川課長は、家庭を持ちながらも、酒の勢いで宮下とラブホテルで一晩を過ごした。その後、正和と宮下は、仲直りし、式を挙げるまで関係が進んだ。披露宴の出席人数を数えている正和は、ご祝儀だけを手渡したものの式典に来てくれない早川課長の行動が怪しいと思い、宮下を問い詰めたところ、宮下は早川課長との関係を認めた。その関係は二人が別れた間に起きたことであるが、正和に多大なショックを与えた。

本作にわたり、メインキャラクターたちは、ほぼ過ちを犯したことがある。しかし、モラル上の過ちを犯したのは、いずれも社会的・経済的地位が高い、前の世代のキャラクターであった。前章で考察したように、戦後日本社会では能力主義が段々抬頭し、能力主義で競争を勝ち抜いた社会的地位、経済的地位の高い人物に対し、世間は道徳面で比較的緩めの基準で見てきた。そのため、昭和期において、よく稼ぐ夫なら、二、三回不倫したり、時々妻に暴力を振ったりしたとしても、許されたことがしばしばあった。不正行為に関わった政治家であっても、３、４年後にまた政界に立ち戻るということも珍しくなかった。しかし、現在、それはまだ通用するのか、社会的

DOI:10.6814/NCCU202100955

地位の高い前の世代は果たして偉そうな態度でゆとり世代を叱り、人のことを言う立場に立ち得るのか、ということについて、宮藤は、批判的な合意で本作のキャラクターを設定したと思われる。確かに一般的に社会的地位が低いゆとり世代が、前の世代に劣っているところは様々あるけど、勝っているところもある。人間関係におけるゆとり世代への批判は、客観性を欠き、まさしく差別というほかはないものである。

本作の前半において、大きなメインストーリーの一つとなったのは、正和の後輩である山岸が起こした一連の事件である。山岸は、ゆとり世代の真ん中に当たる１９９３年生まれの者で、正和の直属の部下である。自己中心的かつ自分勝手な性格で、「泥仕事やりたくないです」、「嫌です」、「そんなことわざわざやる必要がありますか」といったフレーズをしょっちゅう吐いた。よく正和に注意されても気にしなかった。正和も、山岸とトラブルを起こしたくないため、山岸にあまりプレッシャーをかけなかった。

しかし、第 1 話の後半では、山岸は、重大な発注ミスを犯し、しかも本人は全く事態の深刻さを意識していない様子であった。それに対して、正和は、ついに堪忍袋の緒が切れ、山岸を強く叱り、事態収拾のため関係各所に連れ回した。この過程で、正和は山岸と深い交流ができ、山岸が社会人として成長した姿を見てきた。

その翌日、出社してない山岸はグループラインで「会社を辞めます～」と送信し、その理由として正和からのパワハラ被害を訴えた。この急な事態に対し、正和は山岸に連絡を取ろうとしたが、取れなかった。まさに、そのような時、正和は、会社付近の駅で 20 代前半の男性会社員が線路に飛び込む人身事故が起きたというニュースを知った。ここからは第２話「あんたの正義は一体なんだ？」の内容である。正和は、その自殺した者が山岸ではないかと心配し、急いで男性が搬送された病院に向かった。結局、その男性は山岸ではなかったが、一人のゆとり世代の青年が仕事のストレスで自殺してしまったことが分かった。病院で、正和は、自殺した男性の母である田之口明子（真野響子役）に会い、しばらくして自殺した青年の会社の代表者たちも集まった。息子の死を告知されたばかりの明子に対し、当会社の代表者は、淡々と名刺を渡し、お辞儀をして、スムーズに賠償と責任究明の流れに入ったが、その中に、悔しい表情で涙をこらえながら、天井を見つめ男性が一人いた。彼は自殺した青年の元直属上司、後藤であった。この後、表 7 に示されるように、正和は、田之口家を訪ね、明子と交流し始め、自殺した青年のヒロユキのことがさらに深く分かった。

DOI:10.6814/NCCU202100955

表７（『ゆとりですがなにか』７１、７２頁より）

シーン	田之口家．台所	時	昼
キャラ	坂間正和、田之口明子		
	（正和は明子に料理の手伝いをしている、二人は野菜を切りながら）		
明子	聞きづらいでしょうから勝手に喋りますけど、子供の頃は甘えん坊だったんですよ。主人が亡くなってからね、人が変わったように…明るく？地元のお祭りとか、ボランティアに参加したりして、みんなに好かれてたの		
	（それを裏づけるようなスナップ写真や遺影あって）		
明子	…今思えば、私に心配かけまいと、気を張ってたのかな…。		
正和	何か原因は、あるんですか？		
明子	…。		
正和	（手を止め）あ、すいません、遠回しに聞くより、ストレートに聞いた方がいいかなと。		
明子	お上手。		
正和	え？（手元見て）はは、居酒屋で働いてるんで。		
明子	思い当たらないんです何も、本当に。見てください、あの子のパソコンの履歴（とノートパソコンを開き、見せ）ね？前の晩、知らない人のお悩み相談に乗ってるんです。ベストアンサーに選ばれたって見せてくれたの。ほら、死ぬ人間がこんなことする？中学生の性の悩みに真面目に答える？		
正和	（答えが見当たらない）		
明子	でもね…後藤さんの話だと。		
正和	ああ…後藤さん、はい。		
明子	曰くヒロユキは…一人じゃ抱えきれない量の仕事を引き受けて、最終的に後藤さんに泣きついて助けてもらった事があったそうなんです。２、３度。それ以来後藤さん、大丈夫か？手伝おうかって随分気にかけて下さったようで。		
	病院（回想）後藤、悔し泣きしている。		
明子	だけど４月に異動になっちゃってね。自分が傍にいたら気づいてやれたのに、悔しいって		

DOI:10.6814/NCCU202100955

	…。あれ？私何作ってんのかしら。
	まな板まわりに雑に切った野菜が散乱している
正和	あ、僕は…焼きそばのつもりでした。
明子	焼きそば！？言った？私。
正和	言ってないけど…なんとなく。
明子	ないわよ麺。
正和	ええ？
明子	あはははは…うどんならある、焼きうどんで行こう。
	フライパンを火にかけ、野菜を炒める明子。
明子	…ああ、初めて泣かずに喋れた今日、ヒロユキの話、ありがとう。
正和	そうですか。
明子	時々、思い出した時でいいから、いらして下さる？
正和	え、僕がですか？
明子	会社の人たちも訪ねてくださるけど…あの人たちには本当のこと話せないから。
正和	関係ないですもんね、僕。
明子	（頷く）…なんだよ、結局泣くのか…情けない。
	と、涙を袖で拭いながら野菜を炒める明子。

戦後の日本社会においては、前章で言及した日本文化論の「否定的特殊性認識」のように、「反省」という行動と思想が一定の程度で普及した。自分の身に何らかの不祥事や、不運が起きた時、外的要因を検討する前に、まず自分で何故事前に予想・防止できなかったのかについて、自分を問い詰めるという傾向が見られる。場合によって、加害者より被害者が先に検討されることもある。ヒロユキは、物語の中に登場しておらず、彼についての描写はほぼ母の明子からの回想を通してしか行われなく、かなりのフラットキャラクターではあるが、その存在は本作において大きな象徴的な意味がある。従来の日本式縦社会において、下層にある若手社員は上司に対し、会社に対し忠誠と尽力を常に求められ、このような人間関係の中で、過労死という言葉が出たほど、新社会人に与えたプレッシャーが、生理的、心理的な悪影響を与える大きな要因となった。このような現象は、二十一世紀に入っても改善できず、宮藤が本作を完成した２０１６年の前後にも、新社会人をめぐる重大の労働問題が何件かあった（２０１５年電通新入女子自殺事件など[115]）。

[115] https://www.businessinsider.jp/post-205665（最終閲覧日：２０２１/０４/１５）

DOI:10.6814/NCCU202100955

宮藤が表 7 の画線部の明子のセリフに示すように、ヒロユキは上司から過重労働化された真実を表明した。そして、ヒロユキというキャラを死なせたのは、歪んだ縦社会の人間関係の中で新社会人が犠牲者になりやすいからである。

母の明子の回想では、ヒロユキは、温厚で人柄もよく、几帳面な好青年であった。親の目線から我が子を見る時は、多少情感的なところがあるだろうが、こんな優れた青年でも、過酷な環境で羽を伸ばせる余裕がなく、結局地に落ち、散って行くということが、宮藤が本作を通じて伝えようとしているメッセージとして捉えられると思われる。

社会人の人間関係においては、よくある人物が特定の領域でどれくらいの成果を獲得したのかによって、この人物に対する接し方が変わってくる。そして成功を掴めないのは個人の努力不足のせいで、自己責任が問われがちである。宮藤は、人生の道を自ら断ったヒロユキを通じて、このような人間関係を批判しているのである。

最後に、『ゆとりですがなにか』の第８話の内容を取り上げて分析したい。第８話のタイトルは「正義のプロポーズ」である。本作の前半では、正和は、業務責任を問われ、本社から傘下の焼き鳥チェーン店「鳥民」の店長に異動させられることになった。そして第 8 話はこれまで店頭勤務に一切触れていなかった正和が、大変苦労してようやく新しい仕事に慣れ始めた頃のことである。

努力している正和の姿が、まりぶに影響を与えた。前節に挙げたシーンで麻生が自白したように、まりぶは、高校まで神童と呼ばれるほどの優等生であった。しかし、大学受験の期間中で、父は不倫相手を連れて家を去り、自分と、父の連れ子で腹違いでもある兄だけが残された。まりぶの母は、自分の子供が元旦那の子に勝って欲しく、まりぶに絶対兄と同じく東大法学部に受かるよう、莫大なプレッシャーをかけた。父が与えたショックと母が与えたプレッシャーに耐えられなかったまりぶは、結局、落第し家出した。それでも彼は東大法学部の入学試験を受けることを諦めなかった。正和たちと出会った時点では、すでに１１浪もした。しかし、まりぶは、妻と子供を持っているため、やりたいことに執着するほどの余裕もなかった。やがて物語の後半に、彼は、東大法学部の入学試験を断念し、植木職人の見習いとなった。これは彼にとって全く新しい分野の仕事であるため、初めの頃は色々ミスを犯し、職場の先輩たちに、それをまりぶの「ゆとり」のせいにされた。まりぶは、複雑な気持ちを抱えながら、同僚たちと一緒に正和が働いている「鳥の民」に飲みに行った。偶然その場に山路もいた。表 8 に見られるように、その深夜、山路は、まりぶのアパートを訪問する。

DOI:10.6814/NCCU202100955

表８（『ゆとりですがなにか』２６０頁より）

シーン	道上のアパート	時	夜
キャラ	道上まりぶ、道上ユカ、山路一豊		
	（「鳥の民」を出た後、山路が道上のアパートに訪ねた。）		
まりぶ	カッコいいよ。		
山路	坂間君？		
まりぶ	うん。自分にとって大事なものちゃんと分かってるし。そのためにハードな状況で、ズタズタに傷つきながら闘ってるし。俺さ、あの店の何が好きかってさ。坂間っちの働きっぷりなんだよね。		
山路	あ～「鳥の民」。		
まりぶ	あれ見せたくて行ったの今日。**職場のヤツらに。ゆとりゆとり言うけどさ。あんなにゆとりねえヤツも「ゆとり」なんだぜって。**いろんなとこにぶつかって、皿割って、バイトに怒鳴られて。タレと塩間違えて水道で洗ってさ（笑）。いねえよ、そんなヤツ。向いてねえよ。		
山路	（笑）確かに。		
まりぶ	**でもカッコいいじゃん。あれ見てたら、俺も何かやんなきゃって、思うじゃん。**自分探してる場合じゃねえなって。		
山路	自分探してたんすか？		
まりぶ	フフ…おっぱいおっぱい言いながらな。だからやめたよ。参考書も全部売ったよ。		
山路	あっ！		
まりぶ	まぁな。植木職人が天職かどうか分かんねえけど。やりがいあるし、現場終わりのビールと、坂間っちの焼き鳥、やっぱうまいし。間違いねえわ。		
山路	うん。間違いないね。		
まりぶ	頑張んないとな。こいつらのためにも。		
由加	ヤット デテキタ。ワスレテンノカト オモッタ。（強いなまりで）		

前章で考察したように、経済成長を成し遂げた日本社会において、特にバブル崩壊後、能力主義と成果主義が台頭した。学業の成績、営業の業績や商品の売り上げなど、具体的な成果がより重視され、それは一人の人間として

DOI:10.6814/NCCU202100955

の価値を判断する大きな基準となった。人間関係においても、相手の能力や、ある領域で得た成果によって接し方が変わることがしばしば見られた。しかし、結果だけがすべてではない。正和は自分に全く向いてない職場においても、地道に、確実に新たなものを学び、努力している。その姿勢がまりぶを感動させた。表 8 の画線部のまりぶのセリフが宮藤が努力しているゆとり世代への思いだと見受けられる。

ゆとり世代の若者にとって、理想を貫くには大きな妨げが存在している。それは、前の世代の上司、先輩に厳しい目で見られることである。ゆとり世代は、ゆとりという外されないレッテルを張られ、社会で生存するには、スタートから過酷な状況に置かれているのである。この残酷な人間関係において、正和たちのような「ゆとり世代」は重荷を負いながらも、希望を諦めず真剣に人生に向き合い、少しでも地味な理想を目指して歩んでいく。このような努力し続ける過程を、宮藤は本作で穏やかで緩めのペースで描くことによって、観客の共感を獲得しようとしたのである。

全体的に言うと、宮藤官九郎が本作で示した人間関係像が、日本社会に広く見られる社会人のそれと違ったものは、以下の三点にまとめられると考える。

１、　社会的地位が低い者は、必ずしも高い者に劣っているわけではない。

日本社会は古くから階級制度が存在した。前章で整理した歴史的変遷により、現代の日本社会では経済的、社会的地位で人間としての価値、階級を判定する傾向がなお強い。しかし、宮藤は本作では麻生さんと早川課長という「地位が高い」キャラを設定し、それをゆとり世代の主役陣との対照的な存在にした。宮藤は、この設定を通じて、現実社会の「判定基準」を揺らがせようとしたのであると思われる。

２、　成功できるかどうかは、必ずしも個人的要因と直結するとは限らない。

現実社会の基準でみると、仕事に追いつけないヒロユキは「失敗者」に分類されがちであり、失敗はよく自己責任と咎められやすいが、宮藤は、ヒロユキを通じて、ゆとり世代の若者が直面する現代日本社会での苦境を披露したのである。

３、　能力や成果より、努力する姿勢がさらに大事である。

能力主義と成果主義が１９９０年代以降各職場に浸透した。正和は、店長、または焼き鳥店の従業員としての才能がなく、適性も良くない。そして彼が「鳥の民」の店長として働くこと自体は、能力主義と成果主義的な視点から評価を得られなかったはずである。しかし、彼の頑張っている姿はまりぶを励ました。ここで宮藤は現実社会の主流となっている能力主義と成果主義に対し違った見方を示したのである。

DOI:10.6814/NCCU202100955

結論

以上のように、戦後の学校と職場における人間関係像の形成と変遷を整理してきた。同時に、宮藤官九郎がドラマ作品で描いた人間関係像も分析した。そこで得たポイントを以下の表９と表１０にまとめる。

表９、人間関係像の比較（学校）

戦後以降形成された日本人の人間関係像	宮藤官九郎が描いた日本人の人間関係像
生徒らしく	既成の体制や伝統にぶつかることは必ずしも悪いことではない。
集団主義、一斉主義	敵視の根本的な原因は相互理解が足りないことにある、という場合が多い。
自分たちと違った他者への敵視、いじめ	人間はそれぞれが独自性を持つ一個人であるため、差異を尊重すべきである。
校則への一方的な遵守	青春時代に皆は過ちを犯すが、その過ちに引きずられる必要がない。反省はすべきだが、許されるべきである。

表１０、人間関係像の比較（職場）

戦後以降形成された日本人の人間関係像	宮藤官九郎が描いた日本人の人間関係像
経済的、社会的地位が高い者の優位がさらに強化されたこと	社会的地位が低い者は、必ずしも高い者に劣っているわけではない。
「就職」と「いい仕事表現」の難易度、考え方が大分変った。	成功できるかどうかは、必ずしも個人的要因と直結するとは限らない。
能力主義と成果主義の浸透化	能力や成果より、努力する姿勢がさらに大事である。

戦後形成されてきた日本人の人間関係においては、「集団主義」の影響力が著しいものであった。「集団主義」は、特に林顕宗が指摘したように、「同質性が持つ対象を吸収し、異質性が持つ対象を排除すること」ということが特徴である[116]。しかし、宮藤は『ごめんね青春！』と『ゆとりですがなにか』で、集団主義に対し疑問、批判的な態度を示した一方で、他方で前述の「集団主義」と若干違う日本式集団主義的表現も見せている。例えば、

[116] 林顕宗、張瑞雄、前掲書『日本社會』１５０、１５１頁。

DOI:10.6814/NCCU202100955

『ごめんね青春！』では男子と女子は、聖駿高校の代表として駅伝に参加し、一部の生徒は痛みを隠しながら、またはある程度の犠牲を払っても走り続けた。これは、「強烈な集団意識と連帯感」または「集団的合理主義が個人的合理主義に代わること」の表現として捉えられる。この点から、宮藤自身は、集団主義を全般的に否定するわけではなく、個人、個性を尊重することを前提に共同体を構成するのが理想的な人間関係像である、という考えを表明したのである。

林晏如が提出した、日本ドラマに見られる諸要素が、本論で取り上げた宮藤作品の中にも見られる。例えば、『ごめんね青春！』での「男子」という漢字の読み方や、同じ「文字」に違う「読み」で全く違う意味を与える行動は、日本語の特徴である。中国語にも使う場面により読み方が変わる漢字が存在するが、その「文字」の意味は「読み」で与えられたものではなく、「文字」自体に存在するものである。このシーンは、正に単一言語の環境で生み出された「同質性」を大前提に形成されてきたものである。「同質性」が比較的薄い、多言語国家や多民族国家のドラマなら、代わりに語呂合わせのネタが多発するだろう。また、『ゆとりですがなにか』では、正和は、茜と不倫をした早川課長を殴る前も後も敬語の表現を使った。皮肉な意図も含まれていると思われるが、これもまた「階層的秩序」の表現であると見られる。

宮藤が描いた人間関係像は、一見現実社会の人間関係像と大分違い、正反対のもののように見える。しかし、宮藤は、戦後形成されてきた日本人の人間関係像をひたすら切り捨て、または批判するばかりでなく、ある程度継承した上で、さらに開放的、多元的な人間関係を構築しようとしたと思われる。

また、こうした価値観や思いを作品に込めた宮藤が、日本の大衆に受け入れられている。ある程度、日本の大衆はこのような人間関係像を認め、現実社会の人間関係像の変革を望んでいるのであると言える。

二十一世紀に入って以来、従来の日本文化論や日本人論の著作はかなり減少した。代わりに地域研究、グローバル、インターネット時代の国際情勢に関する研究、中国の発展や脅威に関する考察などが注目されている。日本国内なら少子高齢化や介護などの議論が増えたが、書物を通じて文化の研究や発信をすることは、若干時代遅れになっているようにも見える。しかし、ドラマの新しい研究素材や発信手段としての働きが十分に期待できる。現在、Netflix などの OTT サービスは世界範囲で広まり、他国のドラマを観賞する難易度とコストも大幅に減少した。それと共に、ドラマのエンターテインメント性だけでなく、その中に含まれた芸術性と文化性も段々観衆の関心・注意を喚起していくことが期待できる。

宮藤官九郎が初めてザテレビジョンドラマアカデミー賞最優秀脚本賞を受

DOI:10.6814/NCCU202100955

賞したのは２０００年夏の第２５回であった。そして２０２１年春の第１０７回では、宮藤は最新作の『俺の家の話』で通算１１度目の受賞を成し遂げ、また脚本賞の最多受賞記録を更新した。２０年も代表的なドラマ脚本家でいられた宮藤は、この先も自分の思いを込めたユニークな作品を創作し続けるだろう。

先行研究では、現実社会の日本人の人間関係像に関する研究、日本ドラマの特性の研究及文化論、映像芸術視点からの宮藤作品研究を取り上げた。そして本論では先行研究の諸観点を融合するように、人間関係の視点から宮藤作品の分析を試みた。ドラマを素材とする研究も宮藤に関する研究も今はなお稀な存在ではあるが、この分野の著作は今後ドラマと宮藤官九郎と共に進化、成長できるよう期待している。

國立政治大學
National Chengchi University

DOI:10.6814/NCCU202100955

参考文献

著書（日本語）

青木保『「日本文化論」の変容』中公文庫、1999 年。
麻生誠、山内乾史編『現代日本におけるエリート形成と高等教育』広島大学大学教育研究センター、1994 年。
宇野常寛『ゼロ年代の想像力』早川書房、2008 年。
大門正克、安田常雄、天野正子『戦後経験を生きる』吉川弘文館、2003 年。
沖原豊『心の教育：日本教育の再発見』学陽書房、1987 年。
上子武次、増田光吉編『日本人の家族関係』有斐閣、1981 年。
河上亮一『学校崩壊』草思社、1999 年。
宮藤官九郎『ごめんね青春！』株式会社 KADOKAWA、2014 年。
宮藤官九郎『ゆとりですがなにか』株式会社 KADOKAWA、2016 年。
宮藤官九郎『ん！？』文藝春秋、2018 年。
土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂、第 3 版 7 刷、1998 年。
田中角栄『日本列島改造論』日刊工業新聞社、1972 年。
中北浩爾『自民党政治の変容』NHK 出版、2014 年。
中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社、1967 年。
夏刈康男、石井秀夫、宮本和彦編著『家族から見る現代社会』八千代、2001 年。
新堀通也『新堀通也の日本教育歴年史 1979-2004』北大路書房、2005 年。
安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史１：変わる社会、変わる人びと』岩波書店、2013 年。
安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史２：社会を消費する人びと』岩波書店、2013 年。
山本正身『日本教育史：教育の「今」を歴史から考える』慶応義塾大学出版会、2014 年。

著書（中国語）

Roger J. Davies、池野修著、王家軒、劉建宏訳「頑張り：28 個關鍵字解讀當代日本文化」（The Japanese mind：understanding contemporaryJapanese culture）遠足文化、2013 年。
中根千枝著、何乃英訳『環環相扣 ： 日本縱向社會的人際關係』錦繡、1994 年。
李卓『日本近現代社會史』世界知識出版社、2010 年。
林頭宗『日本社會』新陸書局、1996 年。
林頭宗、張瑞雄『日本社會』致良出版社、2000 年。
蔣豊「天使與魔鬼-日本教育面面觀」香港中和出版、2017 年。

学位論文

DOI:10.6814/NCCU202100955

林晏如「從日本民族性的觀點探討日本人的言談特色-以日劇為題材的案例分析」（国民性から見た日本人らしい談話表現の諸相―テレビドラマによる事例研究―）淡江大学日本語学科大学院修士論文、2015 年。

陳逸萱「宮藤官九郎的影像美學」国立台南芸術大学音声及び映像管理研究科修士論文、2010 年。

孫鋼麟「日本企業における人的資源管理の研究ーバブル経済崩壊後企業内人間関係」国立高雄第一科技大学応用日本語学科大学院修士論文、2011 年。

雑誌記事

宮藤官九郎、岡室美奈子「メタドラマの技法―テレビは娯楽の王様なのか？」『ユリイカ』2012 年 5 月号

インターネット資料

２０１８文部大臣質疑応答 https://kirayoshiko.com/ diet_discussions/page/3（最終閲覧日：2021/04/08）。

独立行政法人労働政策研究・研修機構「調査シリーズ No.68 企業における人事機能の現状と課題に関する調査」、2010 https://www.imes.boj.or.jp/research/papers/japanese/02-J-35.pdf（最終閲覧日：2021/04/08）。

伊藤正直「後ハイパー・インフレと中央銀行」日本銀行金融研究所、２００２https://www.imes.boj.or.jp/research/papers/japanese/kk31-1-7.pdf（最終閲覧日：２０２１／０４／０８）。

厚生労働省　2019 年　国民生活基礎調査の概況 https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html（最終閲覧日：2021/04/08）。

國立政治大學 National Chengchi University

DOI:10.6814/NCCU202100955